



リップス 1 / 田所稲造
-The Cosmic Navigator-

登場人物設定／リップスの設定

■ビザリナ共和国の設定

首都はウルロア川河口のジェンツ（Jenz）。バイザル皇国軍の侵攻により、セント・フェリーナ市に疎開首都を設ける。首都奪還作戦に血道をあげる。与党は共和党。フラン・ドレイク（Flan Draik）大統領。

■キャラバン「リップス」のメンバー（親族関係）

ナバス・クルク（Navas, Clux）伝説の剣士、ナバス・ガルシアの長男だが、へなちょこ剣士。首都ジェンツで直接ガルシアがチェルダードに幼児の頃に預けた。バイザル皇国へ行くためである。元傭兵の姉リームよりも、剣の腕が若干劣るが、修行中。史上最弱のヒーロー。いつか強くなって姉を見返してやりたい。しかし、メカニックの操縦ならば高等技能を発揮する。また、人をまとめるのが得意で、伯父のチェルダードの意図に基づいてチーム全員に的確な指示を出す。

イプス・カイザル（Ipus, Kaizer）颯空拳というビザリナ独自の武術で接近戦に強い。拳を使って敵を倒す。正規軍予備役。兵役召集がイヤだ。身の丈2メートル以上。筋肉モキモキのムキムキマン。だが、シャイで無口。基本「ああ」しか言わない。意外と手先が細かい。髪の毛は茶髪でいつも整髪料で上に立てており、トレードマークとなっている。

セペル・チェルダード（Sepel Cheldard）退役軍人。元ビザリナ陸軍大佐。現在、隊商リップス責任者。準正規軍総指揮官（現陸軍大佐）の元上司で、軍内部でも伝説の大佐として名高いし、バラバラになったナバス3兄弟を探して救済する暖かな面もあるが、多少商売が汚い。老境に入ったので、アタマはバーコードヘアー。

ナバス・リーム（Navas, Ream）武闘家の家に預けられ、男勝りな少女として育つ。アーツウォーク市で傭兵経験あり。剣術は、弟のクルクよりも優れており、ライト・ムーヴァーの操縦もきちんとこなす。常に赤い甲冑を着けており、逞しく見せているが、えび茶色に染めた髪と、メイクを取れば、主人公のナバス・クルクにも似る。勝ち気で元気を取り柄。

ナバス・レマーユ（Navas, Reamaju）修道院に拾われて育つ。敬虔な修道女。チェルダードが現役の軍人だった頃、セント・フェリーナのビザリナ国教会から「派遣司祭」として特赦を受けてリップスで祈りを捧げる。普段は聖書と聖歌集でミサを執り行う。怒ると呪術の祈祷書を持ち出してきて、呪詛を唱えると、とてつもないチカラを発揮する。普段はコーヒーショップの人気者。

■キャラバン「リップス」のメンバー（親族以外）

チャタ・ファーナ（Chata, Fana）隣国ファビオのお貴族のお嬢様。一応ヒロイン。キャラバン発

足当時、リズアーモ駅近くの麦畑にキャラバンリップスがあり、父のお付きの時は、途中下車して珍しい物を買っていたのが楽しく、ビザリナ共和国に政治亡命してきた。キャラバン時には、売る側のキャッシャーで、日用雑貨から食料品までを元気に売っている。クルクにほの字？

チャタ・ナーディル（Chata, Nhadil）ファーナの弟。姉を奪還する命を受けて、メルグヴィッツ空港で奇襲をかけたが、ミイラ取りがミイラになる。現在、メカニック見習いとして、リームのもとで脅迫されながら、メカと剣術のスパルタ教育を受けている。いつか偉くなって見返してやりたいと常に思っているが、目下服従するしかなさそうだ。

ジョマ・グリシア（Johma, Gricia）元ビザリー・ニュースのディレクター。極秘取材をしていたら、なぜか住み着く羽目になり、現リップス船長。かつて兵役のときに、セント・フェリーナ基地で3年空軍にいた経験があり、ミリタリー系の知識と技能が半端ない。それでもプロの航空関係者からは「へっぽこグリシアくん」とあだ名されるほど。しかし、一旦操縦桿を握ると、性格が変わる危ない船長。

ラルタ・ニーナ（Ralta, Neana）女性ジャーナリスト。みんなのお姉さん。キャラバンに入らされてからも、ビザリー・ニュース（テレビ局）のレポーターであり、中継映像で、メディアでは少しは名が知れている。現リップス渉外担当。通信員。時に小さい戦闘では指揮を執ることもある。準正規軍准士官のイエラ・ミラルディとは、リップスを通じて友人関係に。

■その他周囲の皆様

チャタ・ディルジア（Chata, Dhilzia）隣国ファビオ国にある地方のお貴族で、外務政務次官。いつも威張っている。たくさん外遊をするので、世界的にも顔が広い。溺愛している娘を奪還するために、金ぴかのライト・ムーヴァーで迫って来たり、手段を選ばずに娘を奪還しようとしているが、詰めが甘いために、いつも失敗に終わる。娘（ファーナ）ラブ。親ばか。

イエラ・ミラルディ（Iyera Miraldi）リップスの指揮をとる役割。女性陸軍准士官。たたかう職業婦人を地でいく女傑。時に優しく、時に厳しくリップスを直接指揮する。リップスは民兵組織から準正規軍になったので、リップス専属の指揮官となった。

カルバ・ラナリット（Culba, Ranritte）準正規軍総指揮官。陸軍大佐。チェルダードの元部下で、チェルダードのことを（主にこれまでの手柄の面で）一目置いている。ミラルディ准士官の上司。現役時代には、チェルダードと酒を酌み交わす無二の友人。唯一チェルダードと対等な立場で直言が出来る人物。

■世界設定

ダウン・アンダー（南半球）

ビザリナ共和国・バイザル皇国はもとより、その同盟国が位置するウルロア大陸は、南半球にあり、北に行くほど暖かく、南に行くほど寒い気候。ビザリナ共和国リズアーモ（クルクたちの故郷）から真北の海には、リゾート地、ファビオ領ポプリア諸島があり、都会で疲れた人たちのオアシスになっている。

隊商としてのリップスとは

友好国ファビオから、ビザリナ（本国）に、武器・弾薬・食料品・その他生活雑貨まで何でも運んじゃう、何でも売っちゃう「滑空式航空母艦」を使う一種のキャラバン。その規模のため、地方をさまよう「キャラバンのためのキャラバン」「隊商のための隊商」という位置づけ。これは内緒だが、お金で頼まれれば何でもやっちゃう危険な面も。

準正規軍（民兵組織）としてのリップスとは

幸いにして、昔取った杵柄のチェルガードが存在するので、ビザリナ陸軍とのパイプは強いものがある。また、友好国ファビオが背後についているので、物資に困ることはいまのところない。西ビザリナ（バイザル皇国）との領土紛争を抱えているので、一触即発で停戦ラインを破っていつ敵が来てもおかしくない状態。

友好国、ファビオとは

チャタ・ファーナの親父さんはお貴族で、外務政務次官という肩書き上、世界のあちこちに飛んで行かなきゃならない。ビザリナ共和国とは友好関係を保ち、もしビザリナ共和国が窮地に陥った時には、超大国としての責務で、バイザル皇国と対峙する。ささいな話題だが、この外務政務次官のお嬢さんが、リップスに入って戦闘訓練をしているというから、親父さんにとってはアタマの痛い問題である。

■メカニック設定

滑空式航空母艦 ピッツリー 7570

ビザリナ製のピッツリー社製。滑空式航空母艦75式の70番目に設計されたために、7570という名前になっている。少し古い設計。コンコルドの2倍程度の大きさをイメージしていただくと結構です。垂直離着陸も出来、音速で飛ぶこともできる。中古とはいえ、なかなかの性能だ。

ライト・ムーヴァー プラーレ α 60

ファビオ製のプラーレメカニクス社製のライト・ムーヴァー。キャラバン・リップスが制式採用している、いわゆる二足歩行式ロボット。人員を1名乗せて動く二足歩行式ロボットは、総じてライト・ムーヴァーと称する。無印のムーヴァーは旧型でごつく、 α は第一次改良型の60番台設計という意味。

ライト・ムーヴァー プラーレ α 67 **GRANDE**

ファビオ製のライト・ムーヴァー。リップスのより、チャター族が使っている方が高級品。しかしながら、余分なオプションが付いているので、実際の戦闘時には、盾や矛を使わず倉庫に置いておき、もっばらクルクたちが使っている汎用品の武器を使う。

登場人物設定／バイザル皇国の設定

■バイザル皇国（西ビザリナ Kingdom of Bizal、Principal of Bizal）

ウルロア川を境に西半分を領土としている（形式上は）立憲君主制国家。事実上、軍事政権が一党独裁しており、ビザリナ系のパルチザン組織を粛清している。名目上の首都はジェンツだが、現在はビザリナ領なので、宮殿がある王宮特別区、ギルシティにある。

バイザル6世国王（Bizal 6th）

歴代に亘り、東ビザリナの統一と領土奪還に血道をあげる独裁者。この人物に異議を唱えることは、許されていない。

アジク・ナジュー（Ajik Na Jue）

バイザル皇国首相。文民統一党党首。国王にかしづく国王の右腕。

エル・ソーマ・サイモール（El Soma Simol）

バイザル皇国空軍、東部軍管区大佐。リップスを執拗にマークするようになる。

ナバス・ガルシア（Navas, Galcia）

ナバス・イライザ（Navas, Iliza）

ビザリナ共和国に子ども3人を残し、バイザル皇国に傭兵として雇われているらしい。いまのころ音信不通。

ビエネス・バネッタ（Bieness Vanetta）

女性陸軍大尉。エル・ソーマの右腕。かなりの切れ者。リップス殲滅作戦に出ることがある。が、しかし、そんなに簡単に敗れるリップスではないので、苦虫をかみつぶしている。

ジョル・ビパーツ（Joll Bepert）

バイザル皇国の民兵組織「解放戦線協議会」の若きリーダー。祖国をすべて取り戻すために、政府公認で活動を続ける民兵旅団。リップスと同じく、滑空式航空母艦を駆って、リップスと対峙する。リップスとは敵には違いないが、政府正規軍とは違い、行動には柔軟性を持ち、比較的リップスと通じるところがある。バイザル皇国での人員輸送、兵器輸送、食糧支援などを日常的に行っている。

バイザル皇国をかばうウルロア共和国とは

バイザル皇国に対し、物資を、資金援助を行い、人事面での交流も盛ん。ウルロア系ビザリナ人が多いバイザル皇国では、ファビオ系ビザリナ人が多く住むビザリナ共和国は、うとましい存在で、領土を「不法占拠」しているという立場。政治上は完全に断交状態だが、細々と民間レベ

ルで、交流は続いている。ステップ草原地帯を行き来する関係上、そのすべての国境を警備することは、事実上難しいからだ（両軍にとっても）。

（勝手に）イメージソング設定

■（勝手に）イメージソング設定

（現在の勝手にテーマソング）FLOWの歌ならなんでも。

（制作中期テーマソング）約束の橋／佐野元春（[歌詞](#)）

（制作初期テーマソング）愛しき者よ／渡辺美里（[歌詞](#)）

（制作当初テーマソング）なつかしい海／さだまさし（[歌詞](#)）

なんと言いますか、とにかく疾走感のある歌です。

（これにぴったりな歌があったら、どうか教えてください）

小麦畑でつかまえて(1)

ここは、ビザリナ共和国最東端の州、リズアーモ州。州都、リズアーモに近い、小さな農村の中に、なぜか、巨大な滑空式空母が一台……。

「ビザリナ準正規軍、リップスの始まりだ！」
「うむ！！　まあ、ただの民兵とも言うがな」
「……伯父さんの軍人恩給が役に立ったな、クルク」
「そうだなあ、まあ、僕にはこんな船を買う余力なんか、ないもんねえ」
「ふう、退職金が、ほとんど滑空式空母に消えたわい」
「無茶な買い物したものねー」
「誰が無茶じゃリーム！　お前にはクリームのような可愛らしく素直な女の子に育てて欲しいと願って名づけたというのに！」
「あー、はいはい、お説教ならまた今度～」
「すばらしい空母ですわ。ね、お姉さま」
「お、お姉さまあ？　気色の悪い言い方やめて、レマーユ！」

ピッツリー 7 5 7 0 (Pittrie 7570)、滑空式航空母艦搭載の、ナローバンドレーダーが、ひとり滑空母艦に駆けてくる人影を発見した。（もちろん、民間に払い下げてあるので、重火器の類は、必要最小限にとどめているが）。

「リズアーモ駅より、麦畑を、誰かがここへ向かって駆けて来ます！」
「む！　誰じゃ。識別信号を発信せよ。身元確認じゃ。IDを持っていない奴なら、相手にせずに、飛び立つべきじゃ」
「レマーユ、識別信号を！」
「はいっ！　あ、確認取れました！　ファビオ国籍の女性、外交官IDです！」
「何だって？」
「離陸やめい！　離陸中止じゃ、クルク！」
「了解！　って、外交官？」
「相手から、識別信号のリクエストが来ました！」
「リクエストを許可する。あくまでキャラバンとしてのレスポンスじゃ」
「詳細情報入りました。チャタ・ファーナ、十八歳、女性。麦わら帽子をかぶって、トランクを持っています。コード 9 0 9、政治亡命信号受信！」
「何じゃと、政治亡命……ああ、面倒くさそうな雰囲気になって来おったわい……まあ、許可は出すが……コード 9 1 0……」
「女の子で、政治亡命で、外交官特権～？　やばーい、超やばーい」
「ディスプレイに写します。音声着信あり。リーダー、交信を！」

ナバス・クルクは、コックピットから、音声映像モニターを介して、無線通信を試みている。「こちら、キャラバン、リップス！ 元陸軍大尉、セペル・チェルダードの名において、政治亡命を認める」「こちら通信員、ナバス・クルク！ ハッチの鍵を開けるので、急ぎ右舷の最後尾にあるハッチを開け、閉めてください」

女の子の声で、返信が帰って来た。息が切れている。「ビザリナ共和国に、政治亡命を求めます！ 助けて！ 追っ手に追われているの！ 誰か！」クルクが、後ろのハッチから入って、3階の応接室で待つように命じた。追っ手は武器を持っていて、盛んに銃撃して来た。がしかし、ピッツリー7570の後部バーニアの火力は、すさまじいものだった。

チェルダードが、クルクに命じた。VTOL（垂直離陸機）機能で上昇するらしい。最大火力を噴出したピッツリー7570は、勢いで上昇し、ついでに、そのへんの麦わらまで焼いて、追っ手を散らした。

小麦畑でつかまえて(2)

チャタ・ファーナは、自動ロックのかかる応接室に隔離されていた。このキャラバンにとって、まずは「お荷物」「厄介者」「早く帰らせよう」「拾った子猫は元のところに戻そう」……そんな反応、そんな空気だった。チャタ・ファーナに、ナバス・レマーユが言った。「お怪我はありませんか」。すると、ファーナは「大丈夫、ちょっと疲れているだけだから」と応じた。

レマーユは、遠隔操作で、とりあえず冷たい水を用意した。モニター越しに会話する。グラスの水は、応接テーブルの中央がパカッと開いて、グラスの水がせり上がって出てきた。用意をしておけば、たとえば、チェルダードの葉巻とか、そういったものもせり上げることができる。

「ありがとう……はっ！　まさか、毒を盛ってないでしょうね！」
「じゃあ、引っ込みます」「いや、ちょっと、待って、わかった、わかりましたからお水を頂戴」
「まずは、一息ついてください」「ふー、危なかったー」

◇ ◇ ◇

「ところで、チャタ・ファーナさん、どうしてこのキャラバンに？」レマーユが続ける。「父が、ファビオの外務政務次官をしていて、鉄道を使う時は、通関のために、いつもリズアーモ駅で休憩していました。そして、まだ動き始めていない、キャラバン、リップスさんのお店の様子を見たり、食べ物を買ったりしているうちに、なんだか、ここの売り子さんをやってみたくて……」

チェルダードが遮る。「待て小娘。理由は本当にそれだけだろうな……スパイ行為ならば、こちらも容赦せんぞ」。

あわててファーナが取り繕う。「いやいやいや、他の理由……強いて言うならば、もう一つの理由は、私を溺愛する、父が大嫌いで逃げて来たのです」。

応接室のモニター画面は、ナバス・クルクに切り替わった。「本気でここで働く気ですか？」
ファーナが応える。「ええ、そうよ。一度やってみたかったんだあー、キャラバン生活」。
コックピットの一同が、溜息をついた。「お前ら、船の操縦は、カイザルとワシでやるから、そいつを武装解除してくれや。何か持ったらいかんのでな」。

◇ ◇ ◇

ナバス・クルクが、妹二名、リーム、レマーユに向かって、一緒に来るように命じた。クルクはレーザーソードを構え、リームが短銃を構えた。レマーユは呪文の書の上に、十字架をかざした。そして、三人は曇りガラス張りの待合室へ飛び込んだ！

「おとなしく、武器を全部出せ！」

「少しでも隠してたら、姉ちゃん、アンタの命はないね！ 蜂の巣になるぜ」

「あなたは段々眠たくなーる……。眠くなーる……」

ファーナは、ちょっと面倒くさそうな態度で「仕方ないわね、全部出せばいいんでしょ？」と案外素直に応じた。

脚からは、短刀が各一本ずつ。カバンからは、金メッキの短銃が一丁。金メッキのレーザーソードが一本。そして手榴弾一個。ティーンが持つには、いささか重装備だ。まるで、どこかの傭兵のようだ。

「うわ、武器多いぞこの子！」「顔に似合わず、結構な武器じゃねえか」「誰と戦うつもりだったのかしら……」

レマーユの睡眠誘導に連れて、ファーナが本音を語り出した。

「父です。お父様です。お父様が私を監禁するので、自由が欲しくて、部下の方にこっそりお願いして、武器の類は揃えたつもりです。あなたがたと、戦う意志はありません」

しばらくすると、睡眠誘導が本格的に効いてきたのか、こっくりと首をうなだれて、そのまま眠ってしまった。

小麦畑でつかまえて(3)

客人「チャタ・ファーナ」は、個室寝台に外から鍵をかけてベッドで眠ってもらうことにした。ルームとレマーユが、ファーナをかついで客室に閉じ込めた。

一方、滑空式航空母艦、ピッツリー7570のコックピットでは、次の行き先についてちょっとした議論になった。

「メルグヴィッツはどうかあ……。折角南西に針路を取っているんだし……」

「そうだな、そこで商品を仕入れて……」

「ビザリナ第三の都市だしな」

「ジェンツは遠いし、国境沿いの公国軍の治安がね、悪いし、装備も何だし」

「よし、では、今回はメルグヴィッツに決まりじゃ！」

クルクとチェルダードとカイザルの話し合いは終わった。ところが。金ぴかのライト・ムーヴァーに乗って、誰かがやって来た。クルクが、識別IDを確認した。

「うげ！」

「どうした、クルク？」

「何かあったのか」

「あったも何も、あの娘のお父さんだよー！ 外交官IDで、しかも、外務政務次官だってさー」

「おお……チャタ・ディルジアと書いてある……」

そして、チェルダードが、東部軍管区司令部を呼び出した。モニターの向こう側には、イエラ・ミラルディ准士官（女性）が顔を現した。

「どうも、チェルダードちゃ。ミラルディ准士官、元気しとったかね？」

『もうっ、上官でもなんでもなくなったんなら、気安く話しかけないでくれます？』

「まあ、そう堅いことを言うな。実は、国境近くの街で、迷子の子猫を拾った。ほれ」

データは転送されて行き、ミラルディ准士官の顔色が変わった。

『ど、どういうことです？ 女の子と、外交官？』

「とまあ、ここでどうしても働きたい女の子、チャタ・ファーナさんが、政治亡命をお願いしているわけじゃがのう……。あのうるさい親父を何とかしてくれんか？」

『は一……。チェルダード元大佐に関わると、頭痛がします』

「まあ、お嬢さんの希望は、そういうわけじゃ。じゃ、後の事は頼む」

『丸投げ……ですか。は一……。分かりました。チェルダード元大佐のお名前も使いますが』

「わしゃ、一向に構わんぞ、来る者は拒まず、ちゃ」

『じゃあ、そう致します、では』プツンと、モニターの切れる音が。

別なモニターには、ムーヴァーに乗っているカイザルとリームが、暴れるディルジアを押さえつけようと必死だ。

『む、娘を帰せー！ 今すぐにだー！』

『くそ！ 少しはじっとしろ！ 暴れるな！』

『そうよ、どこの野蛮人？ おとなしくしなさい、ってば！』

チェルダードが呼びかけた。「カイザル、リーム、もう軍の皆さんが来られたので、後の事はこの東部軍管区司令部の方々にお任せして、旅を続けようじゃないか、のう？」

『じゃあ、退却すっかー！』

『そうだな』

『金ぴかのオッサンじゃあね！』

『どこへなと行け、勝手にしろ』

ディルジアが怒りをむき出しにして盾や矛を振り乱すが、ビザリナ軍当局のムーヴァーに取り押さえられてしまう。軍関係者は彼をなだめるのに必死だ。

『どうか、本国へお帰りください』

『お嬢さんは政治亡命を希望なさっております』

『くそっ、この馬鹿カムーヴァーがっ！ わしゃ認めんからな！』

とか何とか言いながら、チャタ・ディルジアは、リズアーモの国境を越えて、本国ファビオ側に一旦逃れた。……ここで問題になって来るのは、首都ジェンツ行きの特別列車だ。駅員、運転手、車掌は口々にこう語るのだった。

「主賓が逃げちゃダメだろ……」

「ビザリナ鉄道としては、ここからカラで走る訳にも……」

というわけで、ファビオ鉄道は、特別列車の折り返しをしたのだった。

ようこそ、チャタ・ファーナさん！

滑空式航空母艦の針路は、順調にメルグヴィッツを目指して進んでいる。何しろ、リズアーモから6000キロメートル向こうにある街で、そこで、キャラバンのためのキャラバンとして、商売を続けるのだ。そのためには、大口の仕入れをしなければならない。なにせ、商材がないと、キャラバンとしては保たないからだ。また、国土がすごく大きいため、6000キロメートル向こうと言っても、東京から名古屋、ぐらいにしか感じていないらしい。

その頃、リップスの船内では、長老、セペル・チェルダードが、チャタ・ファーナに、ビザリナ風の普段着に着替えるように命じ、クルクの妹たちが別室で手伝っている。どうやら、お着替えが終わったようだ。

「うむ、これでビザリナ市民じゃ」

「そのへんの子と区別つかないなあ」

「ああ」

「あ、あの……こんな感じでいかがでしょう」

カチューシャに手をやり、恥ずかしそうにしている。

「ファーナさんや、これで、リップスへの仲間入りだ」

「はい、ありがとうございます！」

「随分、うちらしくなったんじゃない？」

「最初、お貴族でしたからね」

早速、メルグヴィッツに着陸する態勢を取り、ナバス・クルクが器用に操縦桿を操って、メルグヴィッツ国際空港に着陸姿勢を取り、無事着陸した。

「あんた、剣術は苦手なのに、こういう運転は得意ね」

「そうだよリーム。剣の技は、上には上がいるんだから」

「ふえー、着きましてよ、神様」

「随分眠たそうだな、レマーユ」

「だって、徹夜で、ひとりで礼拝堂を日曜大工したんですから！」

「そ、それもそうか……って言うか、オレも手伝ったんだけどね。主に木材加工でね」

「忘れていました、お兄さま！」

「……忘れんなよ……さて、ボーディングブリッジに着けて……あ、誘導のお兄さんが旗振ってる……」

ラルタ・ニーナと、ジョマ・グリシア登場！

ビザリナ第三の都市、メルグヴィッツ市の空港に開いた、リップスの市場。キャラバンのためのキャラバン、ジプシーのためのキャラバン、という物珍しさも手伝って、キャラバンでないお客さんやら、野次馬やらが、ピッツリー7570の滑空式航空母艦を取り囲む。

「はい、買う方は船尾左側のキャッシャー、売られる方は船尾右側のキャッシャーにどうぞ！
並んで、並んで！」

ナバス・クルクが威勢良く、メガホンで呼びかける。

「リズアーモ産100%小麦、船尾左側で販売中！」

チャタ・ファーナが元気よく、メガホンで呼びかける。

「いまなら、わたしたちが作ったチョコチップクッキーも一緒にプレゼント中！」

その中を、報道カメラマンと報道記者が歩いてルポしている。民間報道機関、ビザリーニュースの男性カメラマン兼ディレクター、名前をジョマ・グリシアという。同じく、ビザリーニュースのルポ記者、ラルタ・ニーナという女性。

「ここではカメラはまずい、引っ込めよう」

「そうね……」

「ん？ あの記号に、船体にある、7570の文字……」

「どうかしたの？」

「このキャラバン、名前をリップスとか言ったな……」

「ええ」

「武装解除はしているけど、こいつはごつい陸軍のバトルシップ……民間の船じゃない」

「おや？ 早速何かかぎつけたわね。一体どんな嗅覚？」

「いや、兵役のとき、空軍に3年いたんで、かじったことはあるんだが……」

「ふうーん。まあ、それは置いといて、キャラバンでお茶しない？」

「勤務中なので、気が引けるが……お、かぐわしいコーヒーの薫り！」

「私はお腹が空いたんで、サブサンドとジャスミンティを……ちょっと、そこのお嬢さん？」

「はい、いらっしゃいませ、ご注文はお決まりでしょうか？」

レマーユが続ける。そんなレマーユの修道服を見て、ジョマ・グリシアが、また何かをかぎつけた。

（おかしい……ビザリナ国教会の修道女ならば、修道院にいないはず。どうして一般のキャラバンに……むむう……）

「……たは？」

「はいっ？」

「あんたは注文何にするかを訊いてるの。女の子に見とれてたとあっちゃ、殺すわよ！」

「べ、べべべべつに、何でもありません、ニーナさん！」

「なら、早く注文！」

「じゃ、じゃあ、ホットコーヒーのトールサイズで」

「かしこまりましたあ……オーダー入ります……」

ぺたぺたと厨房の方へ行くレマーユ。物陰に隠れて姿を消した。ひそひそ声で、ニーナに耳打ちするグリシア。

「さっきの子、修道服だったよな」

「あん？　それが何の関係があんのよ！　ロリータ趣味？」

「違う。あの服を着ている。つまり、ビザリナ国教会は、外出を禁じているはず」

「だから？」

「あの子はなら何で、おとなしく修道院にいないんだろう？」

「それもそうね……」

「解せない……」

そんなふたりに、ご注文の品が届いた。

「お待たせ致しましたあ、ごゆっくりどうぞー」

そして、そんなふたりに、チェルダードとカイザルとクルクがレーザーソードを突きつける。

「お客さん、あんたがた、どうやら知りすぎたようじゃのう、一回死んでもらおうか」

「秘密を知った以上、タダで帰す訳にはいかない……」

「用心のため、マイク仕込ませていただきました、どうぞ、命乞いしてください」

二人「ぎゃっ！！」

報道機関の者ですが、リップスに加わります！

ナバス・クルクが二人に問うた。

「何だって？ マスコミの人？」

イプス・カイザルがぶっきらぼうにつぶやいた。

「取材なら、許可とってもらわないとな……」

長老、セペル・チェルダードが断言した。

「うむ、まあ、ビザリーニュース社なら、信用はおけるが……」

ディレクター、ジョマ・グリシアが詫びた。

「ビザリーニュース社の報道部門のディレクターで、ジョマ・グリシアと言います。ちょっと昔に兵役があって、空軍に3年在籍していたものですから、このバトルシップに興味は……」

ナバス・クルクが言った。

「だからあんなに詳しいんだねー。おじさん」

ジョマ・グリシアが反論する。

「だから、誰が何と言おうとお兄さん！ おじさんじゃない！」

セペル・チェルダードが訊いた。

「で、そちらの彼女は何か？ アナウンサーかルポライターか何かか？」

ラルタ・ニーナが答えた。

「そうね、そんなところ……なんでも、珍しい大型のキャラバンがメルグヴィッツ空港に来るから、取材させてもらおうと思ったの。わかる？」

クルク・カイザル・チェルダードの3人は、ひそひそ話し合っていたが、やがて結論が出た模様だ。チェルダードがマスコミ2名にこう言った。

「まあ、秘密を知られてしまった以上、帰すわけにはいかん。とはいえ、うちのPRもやってくれるというから……お前さんがた、船長と副船長にならんか。うちは人手不足でなあ……」

グリシアが驚嘆する。

「な、何ですと！」

同じく、ニーナが驚嘆する。

「このアタシたちに、スタッフううー？」

チェルダードは、さも当たり前のように返答する。

「そうじゃ」

クルクは、嬉しそうに言った。

「あんた、面白そうで気に入った。ここから、スクープをジャンジャン出してよ」

カイザルが、ぶっきらぼうにつぶやいた。

「まあ、悪者ではなからう……」

意を決して、チェルダードがゴーサインを出した。

「決まりじゃ！ 空軍経験者がリーダーに代わって船を操縦する！」

クルクは調子に乗った。

「そして、肩書きは「船長」、なんつって」

カイザルが師匠、チェルダードに質問する。

「じゃあ、ニーナはどうする」

チェルダードは、鶴の一声で決断した。

「んじゃあ、渉外担当。通信担当。これでどうじゃ」

カイザルはぶっきらぼうに答えた。

「決まりだな」

クルクは仕事が減って無邪気に喜んだ。

「これで働きやすくなるぞー」

チェルダードが最後に命じる。

「そいじゃ、よろしく頼む」

やる気のない、グリシアとニーナ。

二人「は一あ」

なぐさめるチェルダード。

「まあ、そう落ち込むな、ビザリーニュースに従前の給与が出るよう、人材派遣契約を結んでおいたから、安心して働き給え」

不服そうなニーナ。

「はいはい、わかりましたよっと……お膳立てがすっかり整っていたという訳ね……恐るべきリップス！」

昔取った杵柄を思い出して、グリシアが興奮する。

「俺は、空軍時代を思い出して、まんざらでもないがな、バトルシップの船長！」

ニーナは頬杖つきながら溜息をついた。

「は一あ、あなたは呑気でいいわねえ……」

◇ ◇ ◇

そして、グリシアとニーナには、それぞれの居室が与えられた。

グリシアが、チェルダードに懇願する。

「あの一、船が有事の際には、僕、ここから船の先端まで行かなくてはならないんですよね」

チェルダードが答える。

「そうじゃ。軽く100メートルはあるからな」

グリシアが、再び懇願する。

「お願いがあるんですけども、居室からコックピットまでの往復に自転車をください」

チェルダードが返す。

「面白いことを言う若者じゃ。脚力に自信がないのか？ さては……」

グリシアが困ったような顔で答える。

「は、はい……。インドア職業ばかりでしたので……取材を除けば……」

チェルダードが応じる。

「んじゃ、ギャレーに赤い小さな自転車があるじゃろ。それを使え」

グリシアが安堵する。

「ありがとうございます」

「船長！」チェルダードが内線電話でグリシアを呼ぶ。

「はっ！ 長老！ しばらくお待ちを！」グリシアは居室から自転車でコックピットに向かう。
キコキコ自転車を漕いでいるいい大人が……という目でみんなが見る。

「船長、ガンバ！」ナバス・リームが野次る。

「おおっ、任せておけ！」グリシアが答える。

「船長、格好悪い！」ナバス・クルクが野次る。

「う、うるさいっ！ これでも必死なのだ！」グリシアが答える。

自転車はやがて、船首にある、コックピットに着いた。

「おお、来たか、来たか」チェルダードが招く。

「はい、ただいま」グリシアが軍隊式にかしこまる。

「次のミッションだが、その前に、予備知識を教える」いかにも長老らしい口調で話す。

「はあっ」グリシアがまたかしこまる。

「まあ、そう堅くなるではない。世間話の類じゃ」チェルダードは笑った。

チェルダードは、珈琲を差し出し、自分も一杯持つと、静かに語り始めた。

「ワシがもう少し若い頃じゃった。ワシは、ビザリナ陸軍東部方面隊の大尉をやっていた。いわば、西部方面隊の援護射撃という位置づけと、友好国ファビオを守るための任務じゃ」

「はあ、はい……」グリシアが応え、チェルダードが続ける。

「それで、今は亡き妻、イライザ・チェルダードが、ミッションの途中でも、放浪の剣士、ナバス・ガルシア……クルクやリーム、レマーユのお父さんだ……ガルシアが残した遺児を拾いに、国境近くのアーツウォーク州や、教会が多く建つセントフェリーナの街などを転々と探した。クルクは、ワシが直にナバス・ガルシアから、首都ジェンツで引き継いだものじゃ。それで、リームを、アーツウォークの民兵集団に傭兵として囲われていたのをワシが救い、レマーユを、セントフェリーナのビザリナ国教会修道院から、特赦を受けて妻が救った。ガルシアが残した三兄妹はこのようにして、いまリップスにあるのじゃ……。」

「そ、そんな重要なお話、私に聴かせていいんですか？」

「君は船長じゃ。ある程度知っていてもらわなければ困る」

「は、はあ……」グリシアが、若干恐縮している。

「可哀想なお子たちじゃよ。物心ついて、父母のぬくもりも知らずに荒んで育っておった」

「今では、すっかり仲良しですねえ」

「左様。彼らは互いの古キズをなめ合うようにして生きて来たし、大尉時代にも、ワシが父親代わりになっておったからのう、だから不必要にやさぐれる必要もなくなった」

「さて、ファーナじゃが、民間人の服装をしておるが、あれは、ファビオ国の外務政務次官、チ

チャタ・ディルジアの一人娘じゃ。弟がおるそうじゃが、父親の監督下にある。さて、チャタ・ファーナは、極端な男嫌いじゃったが、こちらへ引き取ると、同世代の若者に混じって働くと、すぐに男嫌いが克服できた。嫌いなのは、親父さんのことだけらしい。かつて、溺愛されて、監禁されて育ったので、もう少しお日様の下でわくわくしながら働かせるべきだと思っておる」

「は、はい」グリシアが答える。

「珈琲が冷めるぞ、少しは喉を潤さなければ」チェルダードが言う。

「そうですね」グリシアが答える。冷めかけた珈琲に口をつける。

「あー、カイザル……そう、イプス・カイザルは孤児でなあ……嬰兒の頃は、栄養失調状態でお腹が膨れており、大変痛々しかった。難民キャンプで見つけたんだがな、誰よりも瞳が澄んでおった……なので、うちの亡き妻が引き取ることにした。仕方がないのでワシは彼に栄養をつけさせ、そして、ビザリナ颯空拳（たいくうけん）を教えた。みるみる筋肉がついてなあ……拳で野牛が倒せるとか、地面を割ることができるようになってきた……」

「それは凄い……」グリシアが感嘆する。

「じゃろ？ このようにして、メンバーの特性を知るということは、重要なことなのだよ。特に、お兄さんである君には、そういうお兄さんの的な役割も担って欲しいのじゃ」

「あ、はい……全力で頑張ります！」ジョマ・グリシアが応える。

「それから、妻のイライザ・チェルダードだが……」

「はい？」

「剣士、ナバス・ガルシアが、故郷、西ビザリナのケック州に帰った。そのために、ワシと離縁して、奴と結婚して前妻はナバス・イライザになった……あれが正しい選択か判らないが、年格好も、ワシの方が老いていたから、前妻は奴の傍に居る方が、お似合いじゃったのだ……以来、音信不通じゃ……」

「悲しかったですか」グリシアが応える。

「それは……我が身が千切られるような思いがした……若き剣士に、未来を託したばかりに、元妻の生き死にさえ分からない。それに、クルクやリーム、レマーユは、未だに父親の顔を知らない……。何より無念なのは、敵国にイライザを渡してしまったことじゃ。西ビザリナ、つまりバイザル皇国が、あんな国だなんて知らなかったから、無念残念じゃよ」思わず、チェルダードが嗚咽する。

「じゃ、じゃあ……僕は……僕は……どうすれば……長老、気を確かに！」

「ああ、ちょっと思い出話が過ぎたようじゃ。居室に帰って昼寝をするので、船長グリシアくん、次のブルコニッツまでの航路を設定しておいてくれたまえ。元空軍少尉なんだろう？」

「そうです、主に、セントフェリーナの街を守る仕事を三年ほどしていました……」

「人生に無駄はない。嫌な兵役も、今となれば役立つものじゃ。だから人生に無駄はない」

「わかりました長老……船長を勤め上げてみせます」グリシアがきっぱりと言う。

長老が居室に帰り、しばらくしてグリシアは深い溜息をついた。ふと、コックピットを見渡すと、地上のキャッシャーの様子が1台のモニターに映っていた。何だか賑やかだ。どうやら、

ラルタ・ニーナが、独自に取材を始めた模様だ。カメラマンは、クルクらしい。

「キャラバンリポート、ビザリーニュースのラルタ・ニーナが、キャラバン・リップスを密着リポートする新番組です。第一回目は、ビザリナ北東部、ビザリナ第三の都市、メルグビッツ市からです。はじめに、リップスとは、あるキャラバンの名前なのですが、その規模が違います。一般的なジプシーの100倍はあろうかという取引実績、そう、いままさにメルグビッツ空港では、まさに、キャラバンのためのキャラバン、ジプシーのためのキャラバンとして、新たな賑わいを見せています。この船のキャッシャーは、左右に分かれて、売る側の貿易商人と、小口買いをするジプシーたちが集っています。リップスはその仲介役になって、利ざやを稼ぐ……と言えば語弊がありますが、一種の卸売業を展開している、ビザリナでも初かと思われる斬新なキャラバンです。それでは、次回は二週間後、ビザリナ北部、ブルコニッツ空港でお会いできる予定です。以上、ビザリーニュースの、ラルタ・ニーナが、メルグビッツからお伝えしました」ニーナが締める。クルクがカメラを回し終える。「カット！」クルクが叫ぶ。

撮影された画像をチェックするニーナとクルク。

「うん、これで良し。課長に見てもらおうかな、ほれ、伝送！」ニーナがボタンを押す。

「わ、ニーナさん、もう送っちゃうんですか？」クルクがびっくりする。

「映りも悪くないし、お店も忙しいし、あんまりかまけてらんないのよ」ニーナが応える。

「そういうもんですかねえ」クルクが訊く。

「そんなもんでいいのよ」ニーナが吐き捨てる。

「俺、会社員ってよくわからないなあ」クルクが言う。

「わたしは、むしろ今ホットなニュービジネス、キャラバンのためのキャラバンの方が良くってよ？」と、ニーナがうれしそうに言う。

ファーナの弟、チャタ・ナーディル見参！

今回の収穫は、何と言ってもバリアー装置の購入ができたこと。ファビオ国製品なので、品質に問題はないだろう。中古だけど。これで、ちまちまと敵に銃撃を浴びせずに、ほぼ自動で攻撃を跳ね返すことが出来るだろう。まあ、100%とはいかないだろうが.....。

また、リズアーモで採れた魚介類が意外に好評で、また買いたい、とのリクエストがあるほどだった。海から6000キロも離れているのだ。海の魚はありがたいらしい。塩も同じくリクエストが多く、海の塩は貴重らしかった。

居室の一室に設えられた即席礼拝堂では、ビザリナ国教会、セントフェリーナ教区、派遣司祭のナバス・レマーユが、ミサを執り行っている。長老、セペル・チェルダードも参加している。まるで孫の顔でも眺めるように目を細めてうなずいていた。

姉のナバス・リームは、ライト・ムーヴァーの格納庫で、ムーヴァーのメンテナンスと、自分のエナメル製の赤い甲冑を、ひとりワックスで磨いていた。メンテナンスが終わると、動力だけを入れて、静的な試運転を行い、各部機能に問題がなかったので、エンジンを切り、そのままドアを閉めた。鉄の階段の上の方で、ふーっと溜息をついていたところ。

大男のイプス・カイザルは、意外にも手先が器用と見えて、日曜大工の道具を取り出して、滑空式航空母艦、ピッツリー7570の船体に、ちまちまとバリアー装置を据え付ける配線作業に追われていた。間も無く、全部の配線がつながる予定だ。

一方、ナバス・クルクとチャタ・ファーナは、現在工作中的のメンバーのためにパンを焼いたり、夕食のシチューや肉野菜炒めなどを作っているところ。おい、クルク、お前ヒーローだろう（苦笑）家庭的だなあ.....。

そして船長、ジョマ・グリシアは、索敵装置のテストや、レーダーの調整に当たったかと思うと、今まで着ていた背広のまま外に出て、空港スタッフと一緒に給油の様子を見ていた。給油が終わると、燃料代や駐機料金などを、キャッシュで空港職員へと手渡した。

すると船長は、コックピット近くの通信端末に腰掛けているラルタ・ニーナに「ちょっとメルグヴィッツ土産を買ってくる」と言って、国際空港内部の売店へ向かった。どうやら未成年向けには炭酸飲料とチョコレートを。大人向けには地ビールにロゼワイン、チョリソーとナッツに加えて上質なスモークチキンを買うらしい。

そんな、のどかなムードをかき消すように、ラルタ・ニーナが見ているレーダーに、こちらに

向けて一直線に空から降ってくる一台のライト・ムーヴァーを発見した。どんどん高度が落ちて行く。このままでは船に衝突する。ニーナが全員に呼集をかける。

「東の方角から、ムーヴァー機、本船へ向かって突進してきます！ 誰か！ ムーヴァーで威嚇して！」

格納庫にいたリームが、即応する。

『ニーナさん、あたいだ！ ちょっと出撃して来る！』

「頼んだわよ、リームちゃん！」

ふー、っと溜息をつく、今度は配線完了したとおぼしき、カイザルに告げた。

「イプス・カイザルくん？ 手動でバリア装置を起動できないかしら？」

『了解』

「長老！ クルク！ ファーナちゃん！ すぐに持ち場へ戻って！」

『やれやれ物騒よのお、どっこいしょ』

『取りあえずシチュー鍋の火を止めて……ファーナはコックピットへ！ 僕はムーヴァーで出る』

「クルク！ リームちゃんの応援に回って！ カイザルくんも、ムーヴァーに乗って！ ス克蘭ブル出動！」

『わかった』 『了解』

「船長！ ス克蘭ブル出動しました……って、何呑気に買い物袋を提げて……」

『いや、これにはいろいろと事情が……すぐ戻る！』

「敵機一台、ファビオ製のライトムーヴァー、戦闘用よ！ 識別コード……えーっと、あ、出た！ チャタ・ナーディル！ 外交官IDよ！ ファーナの親戚かしら……」

「いいえ、わたしの弟です！」

「ファーナ、コックピットに来てくれたのね！」

「たぶん、わたしを奪還しに来たのだと思います！」

「レマーユちゃんは、祈りを続けて！ 心配いらないわ！」

『でも、でも……』

「続けて！ 礼拝堂から動いちゃダメ！」

『は、はい……分かりました……』

その、空から降りて来た、銀色のライト・ムーヴァーは、勇ましく航空母艦に剣を振り下ろそうとしたが、上空でカイザルとリームのムーヴァー二機に腕をつかまれ、行く手を阻まれた。遅れて、クルクが発進し、奇襲ムーヴァーの胴体の真ん中に剣を突き立てた……。やがて、ギンギラギンのムーヴァーは、最後の抵抗をしようとするが、動力炉を破損したと思われ、オイルや冷却液をさんざん垂れ流した上で、もはやもう動けなかった。

勝負は約5分間で、あっけなくリップスの勝ち、だった。

『ニーナさん、仕留めたぜ、あたいらが！』

『結構な力だった』

『とどめを刺したのは僕だけだね』

「よくできました！ お姉さん感激！」

何もかもが終わった後で、コックピットに船長と長老が現れた……。

「どうしたお前……」

「もうっ！ 船長も長老もしっかりしてよ！ 結局、不慣れなまま、スクランブル出動をかけたのは私なんですからねっ！ 今度から気をつけてっ！」

「はい」「どうも済まんかった」

武闘派のカイザルとリームが「捕虜」を連れてやって来た。「捕虜」はカイザルやリームに威嚇されたと見えて、気を失って、カイザルの肩でだらりと伸びていた。二人に、クルクが告げた。

。

「カイザル、リーム、この少年を待合室へ頼む！ 外側から鍵をかけて！」

「わかってるって！」

「きちんと閉じ込める！」

……チャタ・ナーディルが目を覚めたのは、深夜。礼拝も終わり、メルグヴィッツ市民の方々もお帰りになって、一同が夕食を食堂で済ませた後だった。

「ん……んあ？ おい！ ここはどこだ！ ちくしょ、出口……開かねえ……」

ダン！ ダン！ ダン！ ……ナーディルはガラス窓を叩くが一向に開かない。試しに、鍵を銃撃してみた。キン！ と弾かれて自分が危険だった。やがて、前回と同様、ナバス・レマージュが、モニター越しにご挨拶をした。

「お目覚めですか」

「誰だ！ てめえは！ ビザリナ国教会？ 修道女？」

「はあ、まあ、そんなところですよ。そこで銃を撃つと危ないですよー。跳ね返って来ますから」

「そんなのとっくに体験済みだ！ ここはどこなんだ！」

「まあ、そんなことより、あなた、お腹が空いていませんか？」

「……ぐう……ああ、確かに腹ぺこだよ！ ファビルシティやリズアーモからここまで何も食べてねえ……」

「丁度良いですね。ここに、懐かしい味があります。ホワイトシチューです」

「ホワイトシチュー？ だ、騙されるもんか！ 毒でも盛ってんだろ！ そうに決まってる」

「では、そうじゃないので引っ込めます。どうも済みません……あーあ、懐かしい味なのに」
「分かった！ 俺に食わせてくれ！ 引っ込めるの待った！」
「では、どうぞお召し上がりください」
「ずずっ」
「どこか、懐かしいお味がしませんか？」
「あ、ああ……まあ……」

すると今度は、チャタ・ファーナが、いきなり画面上に現れた！
「こんばんは、ナーディル！」
「ね、姉さん！？」
「わたしねー、ビザリナの女の子になっちゃったのー。どう、庶民的でしょー」
「嘘だ！ 姉さん、あんた誰かに騙されている！ さっきの馬鹿カムーヴァーといい……」
「あら、あなたが荒っぽい奇襲なんかかけるからでしょ？ リップスは、良いところよ」
「噂のキャラバン連中の船かここは！ 親父が連れ戻せ！ って言うから、はるばる来たと言うのに……姉さんって奴は……とほほ……」
「私が作ったシチュー、懐かしかったでしょ？」
「……」

モニター上に、カイザルとリームの武闘派コンビが現れた！
「小僧……なかなかやるな……でも、まだまだだ」
「あんたが鼻水垂らして失神している間に、他の武器は全部押収したからね！ もう今更、あがいても無駄だよ」
「ち、ちくしょう！ こうしてやる！」

モニターに向かって銃を構えて全弾打ち込んでみるが、やはり跳ね返されてしまう……。
「どうも、先ほどの修道女です」
チャタ・ナーディルは、涙目になって銃をかなぐり捨てた。無力感にさいなまれ、歯を食いしばりながら、モニターを見ていた。
「あなたは段々眠たくなーる……眠くなーる……」
コテッ。
「あら、弟さん、意外とあっけないですねー。では皆さーん、待合室へ行きましょう！」

クルク、リーム、レマーユ、カイザルが、ファーナの弟を個室寝台に寝かせて、様子を見に来たファーナが、ビザリナ市民向けの服装に着替えさせ、やがて全てが済むと、用心のため、外側から個室に鍵をかけた。

メルグヴィッツ空港の朝

翌日ーメルグヴィッツ空港の朝。昨日と同じで、よく晴れた空は澄み渡っていた。草原地帯の冷涼な朝の空気が、メルグヴィッツ空港に朝霧を生じさせていた。長老とカイザルは、地上で朝の体操を行っていた。これは、ビザリナ颯空拳（たいくうけん）と呼ばれる、全身に気を漲らせる運動だ。

「いいか、カイザル、ここは滑走路だ。地面を叩き割るんじゃないぞ！」
「ああ」

船長は、民間航空機会社のパイロットと一緒に天候調査。ついでに、パイロット連中と一緒に、パワーブレイクファストを摂りに空港内へ向かった。船長は、こういったロビイストめいた作業がお得意のようだ。特に、空軍に在籍していたから、機長の中には彼を知る者がおり、思い出話を交わしたりしているという。

「お前、グリシア！ 久しぶりー。お前が、今やあのリップスの船長なのかよ！」
「信じられないなあ。マスコミ新聞社の方はどうした？」
「ああ、ちょっとな……あの船の長老の口車に、まんまと乗せられたよ」
「へえー、キャラバンの船長ねえ、お前が……」
「さぞかし毎日が楽しかろう……定期航空路と違って」
「いやあ、胃に穴が開きそうな時もあるよ。お子様たちが無鉄砲すぎて」
「さて、霧がなかなか晴れそうもないんだが……」
「それは困ったな。駐機料金今朝9時までなんだよ、リップスは」
「追加かな」「追加だな」
「は一、あのどんちゃん騒ぎ、今日もまた始まるのか……」
グリシアは、アタマを抱えた。

「南の方向だったら、霧は晴れて来るぞ。セント・フェリーナとか行くには好都合だ」
「逆に、北側のブルコニッツとか、西側のウザビクとか、アーツウオークとか、首都ジェンツ方面は……」
「行けなくはないが、今日は霧が濃い。だいいち、国境地帯は、空軍機の護衛が要る」
「うーん、リップスのピッツリー機も、半分程度は武装解除しているし、昨日、ようやくバリア装置を付けたばかりで、とてもSFみたいな戦はできませんって」
「なるほどねー、武器を買うために商売、ってこともあるのか」
「詳しくは言えないけど、まあ、無くはないね……じゃ、分かった！ 古巣のセント・フェリーナへ向かうことにする！」
「おう、頑張れよ！」

立ち去るグリシアを、笑顔で見送る、元空軍パイロットたち……。
「それにしても、あいつの船に護衛を頼まれたくないなあ……何だか巻き込まれそうで」
「言えてる、どの船よりも狙われやすいだろうからな」

◇ ◇ ◇

グリシアが、艦内放送を流す。
『あー、あー。おはようございます。リップス乗務員の方は、午前8時までに作戦会議室へお集まりください、繰り返します……』
マイクを置く。すると、コックピットに、ニーナが現れた。もうスーツ姿も決まっている。化粧も済ませたらしい。
「おはよう、船長。今日はどこへ行くの？」
「とりあえず、霧が晴れている南の方角……と言えば、古巣のセント・フェリーナ市だな」
「ジェンツとかへは行けないの？」
「ああ、まだこの船は武装が完全じゃない。もし今この船で国境地帯に行けば、きっと蜂の巣にされる。なので、無難で、比較的安全なビザリナ第2の都市、セント・フェリーナ市に決めた」
「それで、出発時刻は？」
「離陸が午前9時ジャスト。そうでないと、駐機料金を追加しないといけない」
「なるほどね。あ、女の子たちは、まだパウダールーム。男の子たちは、何やってんだか」
「あの捕虜の少年も気になるしな……」
「ファーナちゃんの弟さんね。何だか頑固そうだわ」

◇ ◇ ◇

午前8時、作戦会議室……と言っても、スペースの関係上、食堂も兼ねている。みんなもりもり食っている最中だ。話なんか聞いちゃいない。
「えー、次の行き先は、南に5000キロ離れた、聖都、セント・フェリーナ市の空港に着艦する」
「みんなー、分かったー？」
「このウインナーうまい！」「レタスなんて久しぶりだよ」「生野菜っていいねー」「あ、おとうと！」「そうだそうだ、昨日捕まえたあいつに食わしてやんねーと」「リーム、行って来い」「やだっす」「じゃあ、ファーナが行け」「あたしー？」「じゃあ、二人で行くんじゃ」「ええー、めんどいー」

グリシアが、騒音にもめげずに頑張って説明している。
「……あー、それでだなあ、北西方向は濃霧が出ているので、民間の旅客機も出発を見合わせて

いる段階で、ここの滑走路を借りられるのも、今日の午前9時ジャストまでだ。1分でも遅れたら、何千万ミントといった駐機料金が吹き飛ぶことになる、なので、各員においては、遅滞なく行動するように！」

「イエッサー！」

「……本当に分かってる？ 俺の話聞いてた？」

「聞いてたとも」「うんうん」「聞こえる聞こえる」

「は一。それから、次のセント・フェリーナ市で利益が上がったら、自動追尾型のビーム砲、主砲付近に3機、左右の水平尾翼にそれぞれ6機、後部フラップ付近に1機の合計10機を設置する計画だ。もちろん、お小遣いもはずんじゃおう、って算段さ。勿論、能力給だがな」

「それいいー！」「じゃあ、わたしとファーナは、個室の弟さんに食わして来る」「レーザーソード持った？」「持った持った」「じゃねー」「あたしも行きます！」「レマーユは、ここでおとなしく話を聞いとけ」「そうそう、お願いね」「気をつけてー」

お世辞にもミーティングとは呼べない状態だったが、みんなは、頑張ればお小遣いが出ることだけを期待して、モチベーションを維持していたのだった。

「は一、本当に分かってくれたのかなあ……」

「ねえ、グリシアさん！」

「なんだい、レマーユちゃん？」

「あの一、わたし、セントフェリーナの修道院から特赦を受けたものですから……もし修道院関係者にバレたら、どうしていいかわかんなくって……」

「そうだな、長老さんが言ってたな、本来なら、生涯そこで過ごさなきゃならないところを、特赦されて、ということだね。わかる。配慮するよ。逆に、故郷に錦を飾っちゃえ！ いまや、司祭さまなんだろう？」

「名目上は、一応……」

「おっと、時間だ。俺たちはコックピットへ戻る。心配すんな」

「でも、でも、船長さん！」

「じゃあ、後片付けは頼んだぞ！ さて、あと20分で出発ですか」

グリシアとニーナは、とっとと行ってしまった。そこへ、チェルダードとカイザルが現れた。「話は聞いた。お前は、立派に一人で頑張ってきた。孤独にも耐えた。奪還しようとする勢力があるなら、一戦交えようではないか。それに、あそこの神父さんは、そんなことはしない。怖がるのも無理はないが、我々が守る。さあ、わしらと一緒に皿を洗おうではないか」

「心配ない？」

「ああ」

「じゃ、後片付けじゃー」

狭い流し台に、身の丈190センチはあろうかという巨男と、幾分バーコードがかった髪型のヒゲの老人と、修道服を着た少女が並んで皿を洗っている姿を想像してもらいたい。非常に滑稽というか、微笑ましい。

『離陸10分前……』

「いかんっ！　ワシはコックピットに行く！　カイザル、お前はムーヴァーの中で！　それからレマーユ、お前は礼拝堂のシートに座ってベルトを締める！　わかったな！」

「ああ」「はい！」

◇ ◇ ◇

『離陸10分前……』

「こんちくしょう、口を開きやがれ！　さっさと食いやがれ！　もう離陸だぞ！」

「お前らの施しは受けない」

「こら！　ナーディル！　なんて罰当たりな！」

「姉貴も姉貴だ、なんでこんなキャラバンなんかに……うおっ？」

　　リームに襟首をつかまれ、絞り上げられるナーディル。戦慄を覚えた。

「おいお前、黙って聞いてりゃ、こんなキャラバンたあ何だ？」

「ああ、我が弟ながら、もう付き合いきれない。リーム、もういいよ。もうじき離陸だよ」

「あ、ああ。そうだな、この女の腐ったようなへそ曲がり！　ここでみっちり反省しろ！」

「そうね、ナーディルには考え直してもらわないと……今度怒ると、わたしも酷いわよ」

「……」

「ふんっ、行きましょう、リーム」

「そうだな、じゃあ、あたしはムーヴァーの中で！」

「私は、コックピットで！」

大空から見ると、一羽の白鳥のような、フランスのコンコルドのような姿の、ピッツリー7570の船体が、ゆっくりと誘導路上を動き始める。しばらく、メルグヴィッツ市とはおさらばだ。目指すは、聖都、セント・フェリーナ市。ブースターに点火されると、一気に身体に重力がかかってゆく。

セント・フェリーナへ急げ！

リップスの通信端末に、地方病院に滞在中のキャラバンから無線電話が入電した。ニーナが受電した。

「はい、こちら準正規軍リップス。応答願います」

『こちら、南メルグ総合病院の産婦人科の医師で、ミエモ・サントッチャと申します。とても難しい症例の妊産婦さんが1名おられるのですが、これから、セント・フェリーナ市に行かれるそうですね？』

「そうですが、何か？」

『私を含めて、ご家族をセント・フェリーナ市へ連れて行ってくださいますか』

「少々お待ちください……船長！ 船長！ 南メルグ総合病院ってここから何キロ？」

『約250キロだな。それがどうした？』

「医師と、身重の患者さんがいるの。今交渉中だけど、できれば船の速度と高度を落として！」

「わかった！」

「あの一、お待たせしました、速度と高度を下げて目視でそちらに向かっていますが……」

『助けて戴けるんですね？』

「退役軍人の指示を仰ぎます。お待ちください……長老、こうおっしゃっていますが」

「ワシに電話を代われ……もしも。リップスの総責任者ですが、そちら、病院で何かおありのようすな」

『はい、どうしても2日以内にセント・フェリーナ市の病院へ届けないと、母子共に危ない状態でして……。ご主人も、憔悴しきっています……。』

「それで、条件は？」

『移送にかかる運賃、キャッシュで250万ミント、先払いでお願いしたいのですが……。』

「ふむ、なるほど。多少条件は悪いものの、お引き受けする方向で調整します。その場を離れずにもう少しお待ち願いたい。識別コードを発信して欲しいのじゃが……」

『コード910、救急搬送です』『コード950、受諾した』

『良かった、ありがとうございます！』

「では、船長に代わるので、ちょっとお待ち願いませんでしょうかのお」

『はい』

「もしも、船長のジョマ・グリシアです。近くに滑走路か、広い道路はありませんか？」

『あいにく、河川敷しかご利用いただける場所はなく……。』

「そこに垂直着陸を試みます。目印は何ですか？」

『5階建ての、建物の上に、ヘリポートがある総合病院です、草原地帯の中にあります。いま、屋上でシーツを振っています！』

「目視で見えますが……10キロ先、見えました！ 目視で着陸します！」

『おお、来られた！ リップスの皆さんが来られるぞ！ 喜べ！ 助かるぞー！』

「騒々しいなあ……あの一、危ないですから、本艦のバーナーからは、出来るだけ離れてくださいね！ 着艦します！」

滑空式航空母艦、ピッツリー7570は、高度を下げ、轟音を上げて河川敷に着艦した。
「クルク、カイザル、リーム！ 念のため武装して。もし異状があったら知らせて頂戴。じゃあ、行って！」

「分かった」「了解！」

そこは、一面に芝生が敷かれた総合病院で、コンクリートの壁面にはツタが生い茂っていた。そこへ、年の頃まだ20歳代とおぼしき白衣の医師と、助産婦、それに身重の奥さんと、付き添う旦那さんの姿があった。

「リーダーの、ナバス・クルクです」

「ミエモ・サントッチャ、この病院の医師です。まずは、お約束のキャッシュを……」

「はい、確かに受領しました。艦内には医務室がありますので、そちらをご使用下さい」

「はい、分かりました。誘導をお願いします」

「うあ、この奥さん、重い……カイザル、奥さん抱えられる？」

「任せておけ」「おおー！ ひょいと抱え上げたわねー！ お姫様だっこ？」

「どうもお世話になります、イガル・イントンと言います。先ほどの者が、妻のラファニー・イントンと申します、どうかよろしくお願いします」

「いえいえ、お礼は、セント・フェリーナ市に入ってからでいいですよ、医務室近くの居室に誘導します」

「助かります」

各員は、左舷のハッチから、居室階目指して足早に進む。

『カイザル、クルク、リーム！ 聞こえる？ ニーナよ。扉を閉めたら、その人たちの警護をお願いします。よろしくね』

「あん？ わかったってば姐さん……警護します」

「警護してりゃーいいんだね」

「分かった」

『頼むわよ』

滑空式航空母艦、ピッツリー7570が、垂直上昇を始めた。高度が次第に上がって行く。上空500メートル付近で水平噴射に変わった。高度をどんどん上げていき、上空1.8キロメートル（60,000フィート）のところで船長が叫んだ。

『みんな、何かにつかまれ、みんな！ 緊急搬送スピードだ！ 音速を超えるかも知れないぞ！ マッハ2.7ぐらいかな……ともかく、行けえええー！』

クルクは電卓を叩きながら考えた。

「マッハ2.7で5000キロメートルを行くと言うことは.....2.7かける1224km/hで3305km/hと言うことは.....。5000kmを、およそ1時間半で行く！　なんて無謀な！」

イントンさんのご主人が喜ぶ。

「これは助かった！　1時間半ですぞ先生！」

サンタッチャ先生は困惑する。

「しかし、速いのはいいが、母胎に影響はありはしないかと」

イントンさん。

「戦闘機以上のスピードですからね」

医務室でのカイザル、クルク、リームは焦った。

「ちょ、ちょっと待った！」

「音速を出すのはまだやめてくれ！　まだ患者さんをベッドに寝かしつけてない！」

『ううー、もう、じれったい奴らだなあ.....早く寝るなり、座ってくれ！』

「船長、もういいぞー」「医務室、スタンバイ完了」「わ、私たちの方もオーケーです」

『分かった！　全段直結、マキシмумパワーだ、行けえええー！』

「おたくの船長さん、凄く勢いがありますな」医師が問いかける。

「ああ、まあ.....勢いだけはね」リームが苦笑する。

こうして、全火力を噴出した滑空式航空母艦は、一路、セント・フェリーナ市に向けて、まるでロケットか何かのように突き進むのだった。

◇ ◇ ◇

衝撃波で、文化遺産を壊さないようにとの警察当局からの指摘もあり、渋々船長は、教会のない方の隣接する政治都市、フェリーナ市の空港に着艦した。早速、地元救急隊が、ドカドカと医務室に入って来た。妊産婦を抱え、旦那さんと医師を乗せると、救急車がサイレンを鳴らして去って行った。

「一件落着。さてと、ゆっくりとセント・フェリーナ空港へ向かおうとするか！　発進する！」グリシアが叫ぶ。

「さぞかし、ソニックブーム（地上に与える衝撃波）が酷かったでしょうね」ニーナがつぶやく。

「わしゃ死ぬかとおもったわい.....」長老が嘆く。

「今度こそは衝撃波出さないでよねー」ニーナがあきれ顔。

「ただいまー。あれ、船長、今度はどこ行くの？」クルクが問う。

「えー、皆様を、古都、セント・フェリーナ市へお送りいたしまーす」グリシア船長。

「バスガイドか何かかよ！」リームがあきれている。

「疲れた、加速度が身に応えた」カイザルがうめく。

「あー、腰に、腰に来たあー」ファーナが言う。

「お前はお婆さんか！」リームのツッコミは鋭い。

「しずしずしず.....あれ、もう音速ごっこは終わったのですか？」レマーユが言う。

「ああ、無事に病院に届けたよ」得意げにグリシアが言う。

「ふうん.....そうですか。でも皆さん、誰かひとり忘れていませんか？」レマーユが廊下の向こうを指さす。

一同「あっ！ チャタ・ナーディル！」

ここへ来て、ようやく船室に閉じ込めているチャタ・ファーナの弟、チャタ・ナーディルの存在に気が付いた。みんなが居室へ駆け寄る。すると.....。

「きゅう〜」

「ナーディル！」

ナーディルは、シートベルトをしていなかった模様に、ピンポン球のように、部屋中あちこちぶつけたらしく、鼻血の跡が居室じゅうに広がっていた。ナーディル自身は、居室の壁に背中をめりこませて、かなり目を回しているようだった.....。

「すまん、ファーナさんのおとうと！」

「なんでえ、だらしのねえ奴だなあ.....」

「女子のみんな、彼を着替えさせて、違う部屋へ入れてくれ.....居室の掃除は、我々男性陣でやるから.....」

「シートベルト、締めてなかったんですね.....」

一同「ふー、やれやれ.....」

第二の首都、セント・フェリーナ

リップスは、セント・フェリーナ空港に着艦した。ボーディングブリッジを架けてもらい、船長は早速天候調査と称して、民間航空機会社、ビザリー・エアのスタッフルームに、旧知の友人を訪ねた。すると、早速スタッフのうちのひとりが、ジョマ・グリシアに向かって声を掛けてきた。

「おい、お前、ジョマ・グリシアでないの？ いやあ、何やってんだこんな所で！ 久しぶりだなあ……」

「や、やあ、準正規軍リップスの、船長をしている」

「マスコミ屋のお前が？ 信じられない……おい、みんな来い！ 空軍にいた、へっぽこグリシア君が来たぞー！」

「なに？ ああ、へっぽこグリシアが？ 本当だ！」

「やあ、どうもどうも。メルグヴィッツ市から、急患を運んだから、マッハ2.7で隣町まで来たので、そのついでに、ここでキャラバンを開くことにした」

「マッハって……無茶するなよー。で、機体は何だ？」

「陸軍のバトルシップ、ピッツリー7570の払い下げ品だ！」

「お前！ よく事故らなかったな。無傷でいられるのが奇跡だぞ！」

「俺も、あの頃のような、へっぽこグリシア君じゃないよ」と、はにかみながら笑った。

「ま、まあ、天候調査に来たなら、折角だから、ブリーフィングをしよう。まあ、座れ。珈琲でも飲め飲め！」

「ああ、美味しくいただくよ」

「で、早速なんだが、お前が言ってた、4日後のセント・フェリーナ周辺の気候だが……」

一方、ラルタ・ニーナは、早速開かれたキャラバンのレポートをしている。もちろん、カメラマンはナバス・クルク。

「皆様こんにちは。キャラバン、リップスに同行取材している、記者のラルタ・ニーナです。前回、私がメルグヴィッツ空港のロケで、これからビザリナ北部のブルコニッツ空港へ行く、と申し上げましたが、その後の天候調査で北へ向かえないことが分かり、急遽予定を変更して、いまわたくしは、ビザリナ南部、古都、セント・フェリーナ空港に来ております。セント・フェリーナは、敬虔な祈りと、古い文化遺産に満ちた街であり、一種独特の文化圏を形成しています。そんな静かな都、セント・フェリーナ市でも、このようにキャラバンのためのキャラバン、ジプシーのためのキャラバンとして、リップスが活発に商取引を行っています。意外な事に、スタッフの老人自ら店頭に立ち、骨董品の品定めに当たっています。ここでの滞在は今日から3日間。国内線28番ゲートのボーディングブリッジからお越しいただく事が可能となっております。また、在庫限定品の海の幸、小麦製品などは、はるばるリズアーモからもたらされたものです。

このチャンスをお見逃し無く。以上、ビザリーニュース社の、ラルタ・ニーナが、セント・フェリーナ空港からお伝えいたしました」

「はい、カット！」

「ふー、スポーツドリンクを頂戴、クルク！」

「ほらよっと！」

「サンキュー！ あれ、いま試写見てるんだけど、あたし、こんなにおでこ光ってた？ いやー、恥ずかしい！」

「汗かいてたから、誰でもなるよ！」

「撮り直しも面倒だし……仕方ない、本社へ送信するわ……ぼちっと」

一方、コックピットでは、イプス・カイザルが警備ついでに、いろいろな計器類のテストを行っていた。船が乗っ取られないように、常に警護しなければならない決まりになっている。カイザルがコックピットに座っているだけで、絵になるというか、頼もしい限りだ。

その頃、ムーヴァーの格納庫では、つなぎの作業着に着替えたナバス・リームと、ビザリナ風の普段着に着替えさせられた、チャタ・ナーディルが、ちょっとした問答になっていた。

「どうなんだ、お前、親父さんところへ帰るのか、それとも、姉ちゃんと行動を共にするのか、はっきりしなさいよ！」

「うるせえなあ……姉貴に付いて行くしかねえだろ？ ムーヴァーだって動力炉壊されて！」

「鉄道で帰れよ。協力する気がない奴を食わしていけるだけの余裕はないからね！」

「じゃあ切符くれよ！」

「それなら、カネ出せよ！ ひ弱のお坊ちゃまが、生意気言ってんじゃねえよ。いいか、あの親父さんは、ファーナを溺愛し過ぎてる。お前も溺愛されすぎている。このままじゃ良くないと、お姉さんは思うのだ」

「じゃあ、どうすんだよ」

「お前、今日からあたしのメカニック手伝え！ 剣も教えてやる！ 腕っ節だって鍛えてやっから、付いて来いよ！ 絶対に損はさせねえ！」

「畜生……しゃあねえな……メカ、教えてくれよ。あそこにぶら下がっている、オレのムーヴァー直してくれよ」

「うん、まずはそこから直そうか。いや、お前、みんなのムーヴァー、磨くところから始めろ」

「はあ？」

「メカニックについては、あたしの背中を見て、技を盗んで覚える。当面はそうしよう。決まりだ」

「ちっ！」

「てめ！ 舌打ちしてんじゃねーよ！ さっさと磨く！ あ、男手が必要になったら呼ぶから、お前、重いもの持てよ、いいな」

「か、勝手に決めんなよ！」

「おしゃべりはこれまでだ。お前の性根を鍛え直してやる！ さあ、来い！」
「わかったよ……やりゃーいいんだろ、やりゃー」
「随分物わかりが良くなったな。お前を、この手で、一人前のメカニック担当にしてやる！」

一方、ここは売る側のキャッシャー。レジスターが置いてあるところだ。そこで、ファーナがお客さんに向かって声を上げた。

「はい、皆さん、キャラバン毎に1袋限定、お魚詰め放題セール！ 塩漬けにしてありますので、オリーブオイルで焼くだけ簡単！ 美味しく召し上がれますー。スタート！」

群衆は我先に、魚をビニール袋に入れようとするが、なかなか上手く入らない様子。生魚を扱ったことがない人たちばかりだからだ。いつもは缶詰になっているので、勝手が違っていた。

そして、こちらでは買う側のキャッシャー。長老と、ブリーフィングから戻って来た船長が、ビーム砲の品定めをしている。

「ええ、それはもう、状態の良い品でして、正規軍が使用しているものと同等品で、射程は最大200キロメートル。ジャンクにしておくのが勿体ないぐらいで……」

「いや、ジャンクは買えないなあ……。暴発されても何の保証もないんで。保証書の付いているものをお持ちの方！ いませんか？」

「いや、ジャンクも予備で買うのじゃ。スペアとしてな。但し、定価の十分の一でな」

「それで結構でございます。品物は確かなので、どうぞお納めください」

「はい、キャッシュ。お売りいただき、ありがとうございました」

「どなたか、7570につなぐことが出来る、正規品のビーム砲お持ちの方、おられますかー」
とても忙しい。

コックピットには、カイザルが座っていたが、ラルタ・ニーナと、ナバス・クルクが帰って来たので、カイザルはある事を訊いてみようと思った。

「クルク、あいつ……ファーナの弟はどうした？」

「あいつなら、リームに説教されてた。調教するつもりなんじゃない？」

「面白そうね。気が強い者同士、お似合いなんじゃないかしら？」

「ふうん……そうか……なら、良いんだがな」

カイザルは、納得したのか、また黙った。が、次の瞬間……。

「いかん。オレとしたことが……。キャラバンに燃料を小売りするのを、忘れてた……」

カイザルは早足で廊下を船の下弦へと歩いて行った。

「何で、カイザルまで張り切っているのかしら……もしや、売り上げ競争？」

「そういうこと。船長がおひねりを出すっつーから、みんな張り切っちゃって」

「それでファーナまで、あんなハイテンションだったのねー、欲っちな……」

「僕も、ジャンクパーツ売りに行きますよ！ 稼ぐぞ稼ぐぞー、それ行けー！」

「クルクまで！ やれやれ……さてと、レーダーの監視でもしますかね……珈琲淹れようっと」

コックピットは静かになった。ニーナひとりがレーダーや、気象観測衛星、監視カメラ、メッセージや無線の送受信を行っていた。そこに、レマーユがやってきた。

「あれ、ニーナさん、おひとりですか？ 兄はどこへ……」

「クルクかい？ クルクなら、売り上げ競争だ、って言って、飛び出して行ったださ」

「私の喫茶店も、在庫が尽きちゃって……食器洗って帰って来ました」

「じゃあ、茶葉とか珈琲とか、この時期アイスクリームなんかも仕入れましょうか！」

「賛成です！ あと、カップとソーサーが足りません。食洗機の洗剤なんかも」

「うん、わかった。お姉さんに任せて！ こういう時の、人脈もあるのよ」

「人脈ですか……？」

「ビザリー・ニュース社、セント・フェリーナ支局。ちょっと支局長に電話するわ」

「なるほどー！ すごいですー」

しばらくすると、ボーディングブリッジの方から、台車に食器やらスイーツやら珈琲やら紅茶などを積んだ、ビザリー・ニュース社、若手社員が数名やって来た。

「よっ、待ってたぞ！ こっちこっち！」

「ラルタ・ニーナさん……初めまして。ビザリー・ニュース社、支局員若手有志です！」

「早速だけど、この娘のお店、地上のカフェテリアまで、それ全部持って行って、荷ほどきしてくんない？ 棚への陳列もよろしく」

「それはもう、ニーナさんのご友人とあれば、何だってさせてもらいますよ」

「じゃあ、カフェテリアの運営の手伝いも、閉店までよろしくね！ 私から支局長に電話で言っておくから、残業代付くわよ」

「はい、分かりました！ お前ら、行くぞー！」

「うん、結構、結構！ レマーユちゃんにもご褒美が行きますように……っと」

かくして、壮絶な売り上げ競争、第1日目、終了。

セント・フェリーナ空港、二日目！

セント・フェリーナ空港、二日目。長老、セペル・チェルダードが、作戦会議室（食堂）のホワイトボードの前に立ち、みんなに説明をしている。今日の販売体制の確認と、非常事態時のフォーメーションの確認をしていた。キャラバンのためのキャラバンは、今日もここ、古都セント・フェリーナ空港で行われる。

「今日は陸軍のお偉いさん……と言ってもワシの元部下じゃが、お偉いさんが商談に来るので、ワシとグリシアは、ビーム砲装置の正規品の商談に入るので、午後じゅうずっとかかりきりだ。レマーユは今日一日喫茶の用意を。グリシアは午前中、ビーム砲の必要スペックに関するレジュメを作り、昼までに提出するように。午後から商談に同行すること。ニーナはわしらにコーヒーと、ブリーフィングを共に。クルクとファーナはキャッシャー。カイザルはキャッシャーや喫茶などでの警備を。リームとナーディルは……まあ、いつも通り、メカの特訓じゃな。まあ、そういうわけで、二人抜けるので、多少忙しくなるぞ」

「はい」っと答える女子軍団。

「ちーっす」っと答える男子軍団。

「ちっ、やれやれ……またこいつとかよ……」っとつぶやく、リームとナーディル。

グリシアが、昨日の売上報告をした。

「えー、昨日の売上第4位。料金単価が高いので、ジェット燃料を売った、カイザル！」

「おおー！」

一同が声を上げた。意外そうだった。

「地味なのに……」

「そして、昨日の売上第3位。チャタ・ファーナ！」

一同がどよめく。

「おおー！」

ニーナがささやく。

「まあ、妥当な線かしらね、キャッシャーでひとり頑張ってたもの」

「恐れ入ります、ニーナさん」

「そして、昨日の売上第2位。ナバス・クルク！」

一同が、声を上げる。

「さすがリーダー！」

「機械製品は単価が高いからね！」

「でも、1位は誰だろう……」

グリシアが、ドラムロールみたいな口真似をして第1位を発表する。

「ジャン！ 昨日の同率第1位は、レマーユとニーナに決定しました！」

一同がざわめく。グリシアが続ける。

「これは、カフェテリアの収入だな。ニーナがビザリーニュース、セントフェリーナ支局の手伝いもあって、修道女カフェは人気だったぞ！ さあ、それぞれに賞金だ！」

リームが遮る。

「ちょっと待って！ あたいは？」

グリシアが続ける。

「リームちゃんには、特別功労賞として、レーザー反射型、防弾型の赤い甲冑と寸志をやろう」

リームが小躍りする。

「やった！ 今までの甲冑、少し古かったんだ！ おっしゃ、ありがとよ、船長！」

レマーユが、グリシア船長に申し出た。

「あの一、こんな大金、わたし使うところがないので、お姉様と半分こしたいのですが……」

グリシアが言う。

「そうだなあ、レマーユちゃんの好きにしていいいよ！」

がっちり赤い甲冑を決め込んだリームが、レマーユの肩に腕を乗せる。

「さっすが、あたいの妹、よくできてるわー」

「とんでもないです。いつもリップスを守ってくれるのは、お姉様の貢献あってこそです」

「ま、小遣いは多い方がいいからな。ありがたく頂戴するぜ！」

ナーディルが、ちょっと待て！ と言った感じで制止する。

「船長……僕のは？」

「うーん、長老、どうします？」

「ナーディル！ お前は捕虜という立場を忘れたのか！ 黙ってムーヴァーを磨くのだな。まずはその腐った根性から叩き直さねばならぬ！ お金はあるのじゃろ？ 贅沢を言うな」

長老の、怒濤の迫力に気圧されて、すっかり意気消沈したナーディル。

「はああ……」

ファーナが声をかける。

「ナーディル、おとなしくリームの言うことを聞いているなら、少し分けてあげても良くってよ」

「ありがとう、姉さん！」

リームがぼやく。

「ちっ、こんな奴、荒野のど真ん中に置き去りにするがいいさ」

ナーディルがかみつく。

「何だとコラ！ 甲冑女！」

「何だとしてめえ！ ま、待ちやがれ！ 逃げても無駄だ！」

「こっちまでおいで、ベロベロバー！」

「こんのクソガキが！ 待てー！ 後でムチでしばいてやるからなー」

取り残されたみんな。クルクがつぶやく。

「あーあ、行っちゃった。リームを敵に回すとキケンなのに」

レマーユがつぶやく。

「新品の甲冑を差し上げて、私の報奨金を半分こにしたいのですが……」

◇ ◇ ◇

レマーユが、ファーナに廊下で声をかけた。

「ファーナさん、今日は髪型変えました？」

「そうよレマーユちゃん。基本的には変えていないけど、カチューシャのところに、エクステ風にこうやって」

「そう……可愛らしくて羨ましい……私なんか、ずっとこの修道女スタイルでしょ？ 退屈しちゃって……」

「あら、それはそれで可愛らしいわよ。なんか、永遠の思春期みたいで、つややかな黒髪！ 素敵じゃない！」

「え、永遠の思春期ってファーナさん……思春期……ううむ……」

リームが、二人に声をかけた。

「よっ、ファーナにいもうと！ おっす！ おまえらお洒落だなあ！ あたいは、さっき甲冑磨いてきた！」

「……ザリガニ？」

「……ロブスター？」

「ひどい！ こいつら失礼！」

ニーナが、こちらに向かって歩いて来た。

「あらまあ、今日も立派な甲殻類ね、リームちゃん！」

「今度は甲殻類か……ろくな言われ方しねえな……」

「ねえねえ、ファーナちゃんにリームちゃん、レマーユちゃん！ 今夜は女子会と洒落込まない？ その前に、リームちゃんを女っぽくドレスアップしましょう！」

二人「賛成一！」

「ちょっと待って、ニーナさん！ あたいは、その一。甲冑脱ぐとあまり遅しくないんで、遠慮します」

「何言ってるの！ ドレスアップとはいかないまでも、そのザリガニファッション、時には変えてみない？」

「じゃあ、決まりね！ まずはその紅く染めた髪の毛から処理ね！」

「お姉様からバトルファッション取り除いたら……わたしに似るんじゃないでしょうか」

「おおー！ それは楽しみ！ バスルームに直行！ 行きますよ皆さん！」

「ちょ……勝手に決めんなよ！ おい、待て！ 離せ！」

リームは、まず、赤茶色に染められた髪を、脱色して栗毛色に染められた。そして、内巻きショートボブにするために、カーリーアイロンで形を整え、鏡に向かってみんなが発した言葉がこれ。

「誰？」

「誰？　じゃねえよ、あたいだ！　これじゃあ、弱っちく見えるんじゃない？」

「それがいいんじゃない。あら、眉毛は描いていたのねー」

「さあさ、甲冑外して外して……」

「おい！　あたいを素裸にする気か！　やめろ！」

「大丈夫、衣装部屋には商品含め、たくさんのストックが」

「諸君、ナバス・リームちゃんを、衣装部屋に連行だ！」

「ラジャー！」「はいはい」「って！　両腕を持つな！　逃げねえから！」

衣装部屋の中で、リームたちがドタバタガサゴソ音を立てた後、やがて止んだ。

「中に……キャミソールなんて初めて着た……スカート……なんかスースーする……」

「素朴なファッションが、また良し！　お姉さん感激！」

「女の子らしくなりましたね、お姉様！」

「うるせえよ！」

「磨けば光る天然素材！　あとは、サンダルかな？　あ、甲冑は倉庫に入れて施錠して」

「サンダルなあ……ヒールの高い靴は履いたことがねえ……って、施錠って何だよ？」

「この鍵は、明日まで、このわたくし、ラルタ・ニーナさまがお預かりします」

「なんだと？　じゃあ、もし、突然ここでバトルが始まったら、こんなフリフリの衣装のままで出撃すると？」

「そうね、そういうことになるねー」

「後は、眉毛を描いて……ジャン！　クリームのようなリームちゃんの出来上がり！」

「……」

「すばらしい！　お姉さん感激！」

「ファーナも感激！　レマーユちゃんそっくり！」

「あ、まあ……な。いちおう姉妹だしな……」

そこへ、リームを探しに武器庫から出て来たチャタ・ナーディルが姿を現した。

「あの一。レマーユさん、お姉さんを探しているんですが……うわぁ！」

「あゝ あゝ ～！？」

リームとしては、ものすごく恥ずかしい。

「ひっ！　本物！？」

「誰がレマーユだと、コラ！？」

「ひえー、たっ、たっ、助けてくれええええー」

脱兎の如く逃げ出すナーディル。

「ぜい、ぜい、ぜい……まさか本当にレマーユに間違えられるとはな……あたしとしたことが！

」

一方、こちらは、商談中のチェルダード長老と、グリシア船長。そして一方、ビザリナ陸軍の女傑准士官、イエラ・ミラルディさん。そして“ラスボス”、カルバ・ラナリット陸軍大佐が、普段リップスに来ない、セント・フェリーナ軍管区の幹部である。あとは、部下を引き連れて、ピッツリー7570滑空式航空母艦内の応接室へとニーナが案内した。

「大佐、こちらです」

「うむ。やあ、チェルダード元大佐、お元気そうで……」

「おお、カルバくんか。久し振りじゃのお……あ、これは、ビザリーニュース社の社員で、リップスに人材派遣契約されている、船長のジョマ・グリシア。空軍フェリーナ基地で3年の兵役経験がある」

「どうぞよろしくお願いします、ラナリット大佐」

「うむ、うむ」

「では、お掛け下さい」ニーナが着席を勧める。取り巻きの兵士も、別室で控えている。

応接室で、長距離レーザービーム砲を軍から購入しようとする商談が始まった。まず、イエラ・ミラルディ準正規軍総指揮官、陸軍准士官が口火を切った。他の男性たちは、西ビザリナ（バイザル皇国）と、東ビザリナ（ビザリナ共和国）を俯瞰した地図を囲んで腕組みをしていた。

「対するバイザル皇国軍は、地上部隊を増強、首都ジェンツや、アーツウオークなどのウルロア川沿岸に展開、それを、陸軍の空挺部隊と、空軍が空から叩いている、と言ったような状況がここ一～二年は続いています」

カルバ・ラナリット陸軍大尉が、チェルダード元大尉に告げた。

「チェルダード元大尉、本気でレーザービーム砲で、皇国軍とやり合うおつもりか？ 止した方が良い、あなたがたのような民兵組織には危険すぎる……荷が重い」

イエラ・ミラルディ準正規軍総指揮官（准士官）が続ける。

「準正規軍を統べる立場から申し上げますと、いま首都ジェンツでは、首都特別警察と陸海空軍合同で、バイザル皇国軍の首都侵攻を食い止めているところです」

チェルダードが、切り出した。

「住民に食料や物資は行き渡っておるのかね、正直なところ……」

カルバ・ラナリット陸軍大佐が、少し申し訳なさそうにつぶやく。

「それが、地下シェルターに住民をかくまっているような状態で、まるで戦争被災民のような有様でして……」

グリシアが驚いて聞き返した。

「首都ジェンツが、そんなことに……」

ミラルディ準正規軍総指揮官（准士官）が答える。

「対岸からロケット砲が飛んでくる有様でして、物資も尽きる頃だと……まあ、定期的に海軍がジェンツの港から物資を運んで、陸軍がシェルターに物資を運んでいるという有様で……」

セペル・チェルダードは、ジョマ・グリシアに耳打ちした。グリシアは納得した様子で相づちを打った。チェルダードが切り出した。

「よかろう。是非この7570を完全武装化し、物資の空輸は私共にやらせていただきたい。お願いできるかのお……」

ラナリット大尉と、ミラルディ准士官が耳打ちをする。そして、こう言った。

「よろしいでしょうか、命の保証はありませんよ」

チェルダードが応える。

「我々は民兵といえども、訓練を重ねた精鋭部隊じゃ。むしろ、そういうところへ出かけて行って、一戦交えつつも、住民に物資を配りたい。ぜひ、払い下げ母艦を完全武装化して欲しい。危険を察知した段階で、急速に内陸部に待避する。これをお願いできんかのお……カネならはずむ。責任は自己責任で。これがこちらの条件じゃ」

チェルダードが、懐から6000万ミントの小切手を差し出すと、ラナリット大尉と、ミラルディ准士官は度肝を抜かれた。ラナリット大佐が驚いて訊いた。

「こんな大金、どこで？」

「日々のキャラバンの結果じゃよ。キャラバンのためのキャラバン。我々は軍事訓練を積むと同時に、隊商を行っていて、どの空港に着いても感謝感激されとるよ」

ラナリット大佐と、ミラルディ准士官が顔を見合わせ、耳打ちを相互にし始めた。いわゆるひそひそ話の類だ。それが3～4分程続くと、双方が頷き、ラナリット大尉が切り出した。

「いいでしょう。根負けしました。ここの駐機場で新型のバリア装置を2台、それから主砲1門に、レーザービーム砲10機、大至急工事に当たらせてます。ただし行動に当たっては……」

「行動に当たっては？」

「あくまで無理をせずに、ジェンツの東側からジェンツ州の州境ウザビク基地に着艦し、ウルロア川には近づかないこと。それともう1つ。武器弾薬を積んで補給の応援をして欲しいということです」

「うん、うん、それでこそ我が元部下、話が早いのお……」

「ありがとうございます、船長としても、身の安全が図れて安心致しました」

「安全には留意し、こちらの准士官の指揮命令系統に従うこと。これが最後の条件」

「商談成立よ、グリシアくん、気をつけて。私たちの言うことを聞いて！」

「分かりました、ミラルディ准士官さま！」

カルバ・ラナリット大佐は、控えの兵士およそ30名を応接室に呼び、呼集をかけた。そして、約束通り、中古のバリア装置を外し、2台に増強し、主砲1門を据え付け、レーザービーム砲10機を取り付けることを命じた。完全武装への始まりだ。

◇ ◇ ◇

キャッシャー付近では、中小のキャラバンでゴった返していたが、突然の兵士の出現、そして船体に着々とクレーンで運び込まれ、据え付けられる主砲やレーザービーム砲などの工事場面を見て、「うわー」と言った面持ちで、みんな機体の方向を見ていた。あるキャラバン関係者のつぶやき。

「あの主砲、軍用じゃないか。あんなもの取り付けてどこで何をするんだろう……」

「さあ、分からん」

「まさか、国境地帯に行くとか……」

「そんなはずネエだろ、さあさ、商談の続きだ！ 兄ちゃん！ この塩幾らだい？」

「1袋15ミントになります」

「じゃあ、10袋おくれ！」

ナバス・クルクは、商品売りながらも、実は武装化されて行くピッツリー7570が気になっていた。着々と滑空式航空母艦に備え付けられて行く装備、いやが上にも緊張が高まって行った。

ナバス・レマーユも、カフェで同じようなことを考えていた。戦争に巻き込まれるだろうキャラバンの行く末を祈って、こっそりとカウンターの中で、胸に十字を切った。

セント・フェリーナ空港、三日目！

セント・フェリーナ空港、三日目。毎度の事ながら、朝8時。ジョマ・グリシア船長のブリーフィングが行われていた。朝食兼用で。

「昨日の軍人さんとの会議、交渉の結果、既にこの艦の完全武装化は終わっている。誰と戦うというと、不意に海上などから急襲をかける、バイザル皇国海軍や、物資を略奪しようとする略奪者だ。これから本艦は、北へ12000キロ先の、陸軍ウザビク基地へ向かい、首都ジェンツに送り届ける各種物資を前線に補給する。途中、メルグヴィッツ空港に立ち寄り、燃料の補給を行う。各員においては、緊張感を持って事に当たること」

「分かりました」「異議なし」「了解」「傭兵の頃を思い出して、腕が鳴るよわたしは」「そんな、リームったら」「神様……」

ラルタ・ニーナから補足事項があった。

「いま、首都ジェンツでは、みんなが地下シェルターに入り、また、難を逃れるために、故郷へ帰る人たちが続出しています。放送局はアンテナが破壊されていて、ビザリー・ニュース本社機能は、次第にセント・フェリーナ支局を仮の本社として移転し、近日中に使用する予定です。幸い、地下のケーブル網は生きているので、シェルターの中の人にも、こちらの画像は見てもらえる状況です。食料は、陸軍ウザビク基地から、陸海空軍がそれぞれシェルターに輸送して、今のところは補給路は無事ね」

「ひどい……」「マジで？」「了解」「物騒になって来たな」「首都がそんなことに」「神様……」

チェルダードから補足事項があった。

「なお、フラン・ドレイク大統領ら、政府高官も、ここ、セント・フェリーナに疎開政府を設けることを昨日宣言した。近日中に、ここに政府機能が仮移転する」

全員が無言になった。ジョマ・グリシアが続けた。

「いいかみんな、我々は物資の補給の、後方支援を行う。ジェンツ州には一歩たりとも入るな。あくまで、陸軍ウザビク基地まで。それより西側に行くと、我々の手には負えない、軍事的に。そこで、我々の味方となる、陸軍准士官、準正規軍総指揮官の、イエラ・ミラルディさんの指示に従うこと。いいな」

「はい」「了解」「神様……」「レマーユな、お前、さっきから、それしか言わないのな」「でも怖い……」

ジョマ・グリシアがファーナに向き合って話した。

「そして、ファーナさんの弟の処遇だが、密閉型の人員輸送カプセルに乗せて、ファビルシティーに自動的に送還してもいいのだが……ファーナさん、どう思う？」

「それは……弟次第だと思います。リーム、どう思う？」

「そうだなあ、最近は真面目にムーヴァー磨いてるし、舎弟を手放すのは惜しいなあ」

「グリシアさん、後ほど、弟と直接話をしてみてください。帰るのか、帰らないのか」

「うーむ、それもそうだな。後で話をつけてくる。士気にも関わることだけにな」

「お願いします」

「じゃあ、ブリーフィング終わり！ どうしたみんな、フォークが止まっているぞ！ 食える時に、食っておかなきゃ、準正規軍は勤まらない！ 食べ、食べ」

余りにも重い事実を告げられた後の事だ。みんな同様に、表情がなかなか冴えない。

◇ ◇ ◇

ナバス・レマーユが、ふと、立ち上がって食事を届けに行くところだ。チャタ・ナーディルのもとへ。グリシアが彼女を呼び止める。

「レマーユ、どこへ行くんだ？ ナーディルのところか？ 一緒に行かせてくれないか？」

「ええ、喜んで」

廊下を、ナーディルの居室まで静かに歩いて行った。レマーユは、軽く扉をノックすると、扉は向こう側から自動的に開いた。

「ナーディルさん、例の修道女です。お食事をお持ちしました」

「ありがとう……親父、選挙に落ちた……ははっ、はははは……」

「どういうことだね、ナーディルくん？」

「グリシアさん、親父がね、外遊のしすぎで、ファビオ上院の選挙で敗れたよ」

「どこで知ったんだ？」

「親父から、直接、ビデオレターで」

「チャタ・ディルジアさんが落選、それはどういうことだ……」

「だから、外務政務次官でもなんでもなくなったんだよ、ケッサクだろう？ 保守党が敗れて、ただの田舎貴族に戻ったんだとさ、ははっ」

ナーディルは自嘲気味に笑った。

「まあまあ、残念ですわ……お食事置いておきますね」

「上院選挙は、中道右派連合が勝利か……親父さんのところへ帰らなくていいのか？」

「遠慮しとくよ！ あんな腰抜け親父なんか大嫌いになった」

「なんなら、密閉型の人員輸送カプセルに乗せて、故郷へ強制送還してもいいのだが」

「ちょ、ちょっとやめてくださいよ、グリシアさん、オレはこのスタッフになりたいんです、どうか、お願いします」

「きゅ、急にお願いされてもだなあ……長老やリームが何て言うか、お願いしてみないとなあ」

「伯父や姉には私からもお願いしておきます」

「助かるよ、行くところなくて困っていたんだ」

◇ ◇ ◇

コックピットまで戻って来たグリシアとレマーユを、みんなが迎えた。

「ど、どうした、そんな弱り切った顔をして……」

「あいつ、また何かしでかしやがったんだな！ 叩き斬って来る！」

「ちち、違うんだ！ チャタ・ディルジアさんがファビオ上院に落選し、ただの民間人に戻ったというビデオレターがご本人からあって！」

「ファーナさんの弟さん、行くところなくて困っているんです。スタッフになりたいって！」

「うそ！ お父さん落選したの？」

「長老、船長、間もなく、チャタ・ディルジアさんからの無線通信が入ります、スタンバイ！」

「わかった」

画面の向こう側には、すっかりやつれきった、チャタ・ディルジアの顔があった。

「どうも、リップス責任者、セベル・チェルダード元陸軍大佐……」

「話は大体聞いておる。まずは、残念じゃった……」

「はい、先般の襲撃、お詫び致します。故郷ドリアーゴの屋敷に籠もってしばらくは生活をしたと思います。お願いですから、ファーナ、ナーディルの事は宜しく願います」

「うん。でなあ、あなたがたお貴族じゃろ？ ひとつ相談が……」

「と、いいますと？」

「ビザリナのどこかの、ジェット燃料の貯蔵タンク、満杯にして、油を買ってくれんかのお……燃料について、大変困っておるのじゃが……」

「それはお安いご用です。早速秘書にメルグヴィッツ空港のタンクを手配させます。貯蔵タンク2個分なら、リップスさん専用にするかと。わたくしの方からも石油会社に連絡いたします」

「ありがとう。お礼を言うよ、ディルジアさん。お子さんには皇国軍に指一本触れさせません」

「同盟国のお役に立てるなら、それは本人達も本望でしょう。宜しく頼みます」

「じゃあ」「では」

画面の映像は、プツリと切れた。そして、椅子をぐるりと回転させて、チェルダードがほくそ笑んだ。

「うっしっしっし、まんまと燃料をせしめてやったわい！」

「って、長老！」

「済まないのお、ファーナさん、親父をだまくらかしてやったぞ」

「もう、長老さんったら！」

「ナーディルもごめんなあ……」

「それぐらいでもいいよ、あんな親父だったら……」

「我が伯父ながら、本当に汚い！ 意地汚い！ ああ、いやだ！」

「まあまあ、クルクったら……」

「よし、何万ガロンといったジェット燃料が我がリップスにもたらされた！」

「素晴らしいです、船長さん！」

「じゃあ、あたいらがカネに困ったら、チャタ・ディルジアさんを頼ろうぜ！」

「もう、リームったら……」

「転売しても……利益は出るなあ……」

「カイザルまで！」

パウダールームのヒロイン争い！！

ここは、キャラバン「リップス」の船内。船と言っても、何故か空を飛んでいる。それもそのはず、SFによくありがちな、メインのバトルシップ。つまり「滑空式航空母艦」な訳でして、空母などという、軍事用の船の入手の経路はさておき、ここは船室を改造して作られた広間、パウダールーム。通称「女部屋」の素顔をちょっとだけ拝見することにしましょう。賑やかですよー。うるさいぐらいに。それはもう、はい。

- ・ファーナさん（隣国ファビオのお嬢様）
- ・リームさん（主人公の姉で女剣士）
- ・レマーユさん（主人公の妹で修道女）
- ・ニーナさん（現役ジャーナリスト）

<天の声>

「さあ、君たちの中で、誰が一番ヒロインに相応しいか、競争してみるがいい。私はこれで去る。では、がんばってくれ給え」

「あん？　今、誰か何か言わなかったか？」

リームさんは野生の本能があるらしく、天の声がきちんと届いたようだった。屋内にいても、風呂の時以外は、重たい赤いスーツというか、赤い甲冑を常に身につけている。

「あ、あたしも聞こえたみたい。この中から、ヒロインに相応しい人は誰でしょう、ってお話が」

ファーナさんは、天性の勘というか、第六感が働くらしく、確実に天の声を聴いていたようだった。まあ、天然、と言ってしまうえばそれまでだが……。

「おい、レマーユ、何念仏唱えてるんだ。今はヒロイン争いの時間だぞ！」

「……さあ……祈りに夢中で、何も気づきませんでした」

「まったく……祈ったところで、神様は何もご褒美くれやしねえぞ！」

「実は、私も聞こえたの、って、原稿送信完了っと」

ロン毛の年長者が、情報端末の前からくるりと皆の方を向き直った。そして、やおら言い放った。

「ヒロインは、副船長でもある、この私ね。あなたがたとはキャリアが違うしスキルも違うわ。伊達に、長年ジャーナリストしていないもの」

「ちっ、馬鹿馬鹿しい。そんな事務方みたいなヒロインがあって堪るかってーの。やっぱ女は度胸と強さだ。なので、アタシの勝ち。不戦勝ってか」

「待ちなさいよねー。何勝手に言ってるの。ヒロインは、このファーナさまでしょ。格式が違うのよ、庶民とは。こーんな赤いザリガニみたいなのがヒロインなんて、絶対あり得ない」

「コラ！！　アタシを指さして、ザリガニとは何だよ。失礼だなあ！　アタシに謝んなさいよ！

」

「筋肉バカがえらっそうに」

「バカたあ何だ！！」

「なによー？ スWORDで勝負する気？」

「上等じゃねえか！！ だいたい普段から、鼻持ちならないお貴族風情が気に入らねえ」

「ちょ、ちょっと、やめなさい二人とも。ここは、穏便に。ファーナさん、ザリガニ発言を撤回してちょうだい。そうすれば、丸くおさまるから、ね、ね」

「誰がこんな甲冑女に謝るものですか。だいたい普段から、筋肉バカっぷりが嫌で嫌いで」

「なんだとこらああ！！」

「もう、いい加減になさい。これ以上やると、私も我慢の限界というものがあるので、喧嘩はおよしなさい」

「ばっきゃろー！！ 年増は引っ込んでろ！！」

「そうよそうよ、なに保護者面してるの、バカみたい」

「な、なんですってええええ！！ きいいいいー」

三人とも、SFによく出てくる、レーザー光線系の剣を取り出して、構えた。そうして、ファーナがルームめがけて剣を振り下ろした。そこへ割って入るニーナ。

「乱暴はやめてって！！」

「うるせえ！！ 謝るのが、先だろう！？」

「まだ懲りないのね、あんたたち！！」

「まず張本人のお前が謝れ！！」

「絶対に嫌！！」

命がけの内輪もめだ。ギリギリと光の剣は迫り、頬を青白く染める。そこへ、窓際で祈っていたレマーユが、開いた呪文の書の上に十字架を置くと、なにやらつぶやきはじめた。すると、三人の脚は下から急速に凍って行き、やがて、熾烈なレーザー光もぷつりと止んだ。

そう、出来上がったのは、瞬間冷凍ヒロインたちだった。そうして、レマーユが呪文を終えると、面倒くさそうに本を閉じ、十字架を首からかけ、収納した。

「お姉様方、しばらくアタマを冷やしてください。真のヒロインは、レマーユさまー。ばんざーい。さて、晩ご飯の支度をしなければ……」

と、低エントロピーな声でつぶやきながら、そそくさと部屋を後にした。

さて、彼女たちは、いつ解凍されるのだろうか。それだけが気がかりだ。

キャラバン「リップス」、滑空式空母の紹介

「皆さん、ど、どうも。一応リーダーの、ナバス・クルクです。クルク、と呼んでください。先程は、姉たちがヒロイン争いとかで、粗相をしでかしたようで、どうも済みません。後できつく言っておきます」

「さて、このキャラバン“リップス”は、“ピッツリー7570”という、軍用の航空母艦の中古を、民生用に転用したものです。叔父のチェルダードが、元陸軍大尉でして、なんというか、そのコネを使って、格安で払い下げてもらったもの。整備してもらったので、外見は多少旧式ですが、きちんと空を飛びますし、内装だって新品同様です」

「まず、“キャラバン”を名乗っている以上、誰かからモノを仕入れて、誰かに売る、仲介業者みたいなものなのですが、お客さんも、地上を行き交うキャラバンの皆さんが多いです。つまり、ここは、キャラバンのためのキャラバンな訳でして、キャラバンの皆さんの“業務用マーケット”と言った方が適当かと思います」

「ここが、お客様カウンターで、現在、リップスの女性陣が、接客を行っています。そして、僕ら男性陣は何をしているのかというと、売却する商品を梱包したり、納品したりします。ここらへん一帯が、一階のキャッシャー、と呼ばれている店舗兼倉庫です」

「店舗兼倉庫の二階には、先端のコックピットまで続く、長めの廊下があります。そして、左右に分かれて、居住用スペースがあります。これを居室といい、この二階のことを、単に居室階、と呼ぶ場合があります。さすがに以前、軍人さんが使っていたように、調理室、食堂、個人ごとの居室が完備されています。ここで、珍しい設備を挙げると、たとえば、体を鍛えるトレーニングジム室だとか、レマーユがしつらえた小さな教会、先程の男女部屋、通信室、そして最先端には、作戦司令室があります。おっと、ここからは部外者立ち入り禁止です」

「居室階の後ろ、メインエンジンの前の吹き抜けには、“ライト・ムーヴァー”と呼ばれる、移動戦闘用ロボットのようなものがあります。これは何に使うかというと、有事の際の戦闘要員……僕、カイザル、姉さんたちがこれを操縦し、外敵を迎撃します。あ、ファーナのムーヴァーは、ちょっとデコレーションが派手で、あまり戦闘向きではないようです。……さすがはお貴族さま、豪華だなあ。……また、武装は解除してあるとはいえ、一応、航空母艦なので、最低限、船を守ることが出来る砲撃ブースも、船体側面に各一カ所づつにあります。さすがに、バリアーとかいう高価な装備はありません。コツコツと、チマチマと、敵を倒すだけです。バリアーがあると便利なんですが、誰か買ってくれないかなあ……」

「そして、船を上から見て水平尾翼のちょっと手前にある開口部ですが、ここは飛行機の天井に当たる部分です。そこから前を見ると、小さな滑走路と、カタパルト装置があります。ライト

・ムーヴァーは、この開口部に向かって、高性能の油圧ジャッキでせり上がり、ここから発進、着艦を行います。また、小さな軽飛行機くらいならば、離着陸が可能です。開口部には屋根があり、通常、ここを含めたライト・ムーヴァーなどの保管場所を、格納庫といいます」

「キャラバンの商取引が終わると、一階は側面の扉が閉められます。たまに、乗り遅れたりする女子若干名が、通用口の鍵を使って中に入ってくるので、艦の発進には注意が必要です。エンジンの火力はロケット並みなので、かなり熱いです。また、艦全体のコントロールは、グリシア船長と、ニーナ副船長が担当します。あまりにも居室階の廊下が長いので、居室から船長は自転車を使って作戦司令室に行き、緊急時に備えます。意外とローテクな装備で補っています」

「で、リーダーである僕は何をするかというと、リーダーとしか答えようがないのですが、最終的に物事を判断する際に、船長に運行計画を伝えたり、それを作成したり、チェルダードさんの意見も聞き、店長であるニーナさんにも店舗を開く日時、場所を決めてもらい、僕が総合的に判断して、みんなをまとめるのが仕事です。そういう修行を、若いうちから積むようにと、チェルダードさんは敢えて自分から手を下さず、若い僕らに任せているのです」

「リップスは、国境を越えます。但し、休戦ラインがある西ビザリナ。つまり、バイザル皇国には行けないので、東半分のビザリナ共和国と、その同盟国の間で国境を越えてビジネスやら、依頼の案件などを受けます。表向き、キャラバンとして、各国の物資をビザリナ共和国本国に投下する業務があります。裏向きは……。あまりしゃべっちゃダメなんですけど、準正規軍として、正規軍の後方支援に当たる、ちょっと命がけの任務もあります。業務はお金儲け。任務は任務ですから、正規軍司令室から直接画像で指示が飛んできます。どこそこの部隊に何を運べ、とか、場合によっては、ついでだから敵を倒してくれ、という無茶ぶりもあります、はい」

「リップスの全貌、まだまだお伝えしきれていないのが現状です。船の紹介をしてくれと、チェルダードさんに言われたので……。まだまだリーダー失格ですね」

小ネタエピソード（１）

洗面所でファーナが、Ｔシャツ姿のクルクとリームに声をかけた。

「あなたたち姉弟、全然似てないよねー」

リームが、ううん、そんなことないよ、という顔をした。

「そうかしら。まず、クルクの髪を紅く染めてー。ヘアスプレーで立てたら……」

「まあ、そっくり！」

「リーム、いつの間に洗顔中のオレに何をした！？」

そこへ、レマーユがやってきた。

「あ！ お姉さまが二人！」

「ちげえよ！ オレだよオレ！」

「やっぱりお姉さま！」

「レマーユ！ オレはナバス・クルクの方だよ！ これでも主人公だよ！」

「まあ、あたいのバストは真似できねえけどさ」

「真似すんなよ！ じゃなくて、真似させんなよ！」

「あたいのパッド付きブラ貸そうか、クルク？」

ファーナがクルクにブラを着用させようとする。

「リームちゃん、お着替え、お着替え」

「いらねえよ！ なんだよこのランジェリー！ 金輪際ごめんだね！」

レマーユも続ける。

「お姉さま、早く甲冑を！ 女の子の半裸は良くないですわ！」

レマーユとファーナの二人がかりで、クルクの身体に、勝手にカキンコキンと紅い甲冑が組み上げられていく。

「お姉さま、行きましょ！ ファーナさんも一緒に！」

「じゃあ、オレは髪を洗って……」

「オレにになろうとするなよリーム！ ああもうっ！ 何だよこの格好……」

「さーて、オレはカイザルのところへ行こうかな。まずはスポーツブラに変更っと」

「もうさあ、誤解を招くだろ、って、手を引っ張るなお前らー！」

「うっしっし。今日は一日、クルクの振りしていよーかな？」

このように、色素の薄い髪の中の、ナバス・リームとナバス・クルク。実は、双子のようにそっくりなのでした。



遅れて起きてきたイプス・カイザルが、遅めの朝食を摂りに食堂に現れた。炊事場にいたのは、ナバス・レマーユただ一人。お皿を拭き終えたところ。

「あら、カイザルさま、おはようございます。今日はお寝坊さんでしたの？」

「あ、ああ」

「お食事は？ あー、まだのご様子ですね。今すぐ作りますー！」

「作るって……今朝は何を？」

「ナタデココ入りタピオカミルクとトーストです！」

「ちょ……」

「はい？」

「ちょっと待ってくれ。オレが一番嫌いな物がナタデココとタピオカで……」

「もう、次の街まで在庫がないんですよー。卵とか、ハムとか切らしてて」

「だ、だが。よりによって……」

カイザルの顔がいつになく青ざめて来た。あぶない汗もかいていて、しきりに手をかざして嫌がる仕草を見せた。それを見たレマーユは？

「もうっ、カイザルさま。大人げないですよ。そんなんじゃ、大きく強くなれませんよ！」

「だ、だが、しかし……実際に大きいし……今でも、強いし……」

「屁理屈抜き！ 手加減無用！ ちゃんとお食べてもらいますからね、お残しはダメですよ！」

「あ、ああ……思い出すだけで胃が……喉が……」

「はい、修道女レマーユさんの健康レシピー。でっきあがりー！」

「ぶるるるる！ オレは、オレは苦手なんだ！ だから、勘弁してくれ！ 頼む！」

「べーだ。お断りです。いちデシリットルたりともお残しは厳禁でーす！」

カイザルは、震える手でグラスをつかんだ。目が回りそうだった。気を失うかも知れなかった。が、しかし……。

「よし、オレも男だ！ 飲み干してやる、こんなもの！」

カイザルは意を決して、断固、喉に流し込んだ！

「プファー！ どうだ！ 何てことはないじゃないか！ こんなもの……ウゲッ！」

「カイザルさん、どこ行くの？ ねえ、カイザルさああん！」

その数分後……。ジョマ・グリシア船長がやって来て、レマーユにこう言った。

「おーい、男子便所でカイザルが何者かに倒されていたが、不審者はいなかったか？」

「え？ 不審者？ この廊下では、特に怪しい人は見かけませんでしたよ？」

「じゃあ、一体誰なんだろう……ごめん、仕事中、呼び止めて悪かった、レマーユちゃん！」

「あ、はい……」

レマーユは内心、汗をだらだら垂らしながら独白した。

（カイザルさんを倒したの、実は私です、なんて、口が裂けても言えない……）

そして、事件は迷宮入りになった。

◇ ◇ ◇

小ネタエピソード（２）

ある日のこと。プラーレ 7 5 7 0、滑空式航空母艦のコックピットで。

野性味のある声で、イプス・カイザルが叫ぶ！

「よし、発進する！」

ナバス・リームが無邪気に言う。

「うわー、カイザルの操縦なんて珍しい！」

ちょっと照れた顔で、カイザルは操縦桿を握っている。

「あ、ああ。一応、操縦免許は持っているからな……」

リームが褒める。

「格好いい！ 絵になるカイザル！」

レマーユが祈る。

「カイザルさん、頑張って！」

離陸から数分後……。カイザルがつぶやいた。

「うう、苦しい……」

船が余りにも揺れるので、何事かと駆け付けた本来の船長、ジョマ・グリシアが、コックピットのカイザルに向かって……。

「カイザル君！ 後はオレがやるから、自動操縦に切り替えてくれ！ 頼む！」

リームが不調を訴える。

「ちょっと船長、もう操縦交代して！ 乗り物酔いになるー！」

レマーユもどうやら気持ちが悪くなった様子で、切々と訴える。

「もうやだー。わたしも神様どころではなくなってきましたよ！ 揺れて気持ちが悪い！」

カイザルの目が遠くなっているのを見て、船長がコックピット席のカイザルにささやいた。

「もしや、カイザル君そのものが乗り物酔いなのか？」

カイザルは小さくうなずいた。

「うむ、どうやらそうらしい。とても気持ちが悪い」

見るに見かねて、意を決してグリシア船長が、オートパイロットのボタンを押す。

「いいから今すぐ操縦を代われ！ さてはカイザル君、もしやペーパー免許では？」

「ああ、どうやらそのようだ。よく分かったな」

「お前……オレに代われ！ あっちに座ってろ！ 今から操縦桿はオレが握る！ 危険極まりない！ わかったか！」

そこへ、廊下の向こうから、ファーナさんとクルクがやって来た。

「あれ？ 今の地震、震度幾つだったの？」

「すげえ衝撃だったけど。グリシア船長、なにムキになってんの？」

グリシアが応える。

「ここは高度二千五百メートルだ！ 現在機首上げ中！ みだりに話しかけるな！ マニュアル目視で高度を上げて、機体を安定させる！」

クルクたちに、リームとレマーユが、胃の中身を戻しそうになりながら涙目で訴える。

「ファーナ。地震じゃないよ、あれは、カイザルの操縦だったんだよ！」

「うそ！ あれが離陸？ 地面の揺れじゃなくて？」

「お兄ちゃん、カイザルさんに操縦桿任せちゃダメ！ 乗り物酔いになるから」

「乗り物酔いって、誰が？」

「わたしたちと、カイザルさん本人！」

2人「本人！？」

クルクとファーナは、椅子の上で目を回してぐったりしているカイザルを見遣った。

「きゅう……」

「きゅう……って何だよ。おい、しっかりしろ、カイザル！」

「カイザルってさ、コックピットでは絵になるけど、本人まで乗り物酔いしてちゃねえー」

「こういうペーパードライバーはシャレになんねーな」

「全くだわ！」

高度21000メートル。機体は本来あるべき安定飛行を始めた。溜飲を下げるグリシア船長。眼差しからは、先程の怒りが消え、安堵の表情に変わった。

「ふー、ようやく、航路に復帰した。マニュアルでここまで持っていくのが大変だったよ。みんな、怪我はないか？」

「はい、およそ3名ほどありまーす」

「誰が？」

「通信司令室のニーナさんがおでこの軽い打撲、チェルダード長老のギックリ腰が再発、チャタ・ナーディルくんが居室でシートベルトを着用せず、いつものような全身打撲……」

あちゃー、という顔で、グリシア船長はアタマを抱えた。そして、無線が鳴った。

『こちらは、メルグヴィッツ・コントロール。現在、コントロールできますか？』

「こちら、リップス。ただ今、通常航路に戻った。高度21000メートル。オーバー？」

『了解』……「うわー、今までこの機体とともにコントロールできてなかったんだ。あぶねえ……」

冷や汗もののグリシア船長が、呆れたようにつぶやく。

◇ ◇ ◇

小ネタエピソード（3） スクランブル出動！

滑空式航空母艦、Plahret7570。陸軍払い下げの準正規軍リップスの旗艦（フラッグシップ）。実際の指揮は、ビザリナ陸軍空挺部隊、準正規軍指揮官が遠方の陸上から、リップスに対してミッションを与える。敵機迎撃の際には、キルコール（撃墜許可申請）を指揮官にリクエストし、指揮官が許可する。通信途絶の際には、準正規軍指揮官に代わって、（退役）軍人が。（退役）軍人が行わない場合は、船長が代理でリクエストに応じる。そういう仕組みだ。

リップスには、二足歩行式ライト・ムーヴァーが3台、小型戦闘機が1台揃っている。通常であれば、旗艦（フラッグシップ）には、重装備をしないものだが、民兵.....いや、準正規軍という小型の部隊では、旗艦だけである事が多く、いっちょまえに、バリア装置と、レーザーキャノン、そして実弾系の主砲、軽機関砲がある。

リップスのみならず、同様の準正規軍や民兵組織も多数おり、また、バイザル皇国軍から味方を守るビザリナ陸海空軍もあり、ファビオ共和国、ポプリア諸島などから派遣されてきた援軍もあり、多勢で越境してきた場合は、通常、リップスだけで戦うことはまずない。リップスがじかに戦おうとする相手は、敵のムーヴァーが単独で国境を警備している国境線を、力尽くでこじ開けようとする場合（国境突破）。領土を奪還する場合。自衛のとき。盗賊と戦うとき。今のところは、これで間に合っている。

毎度毎度、ご覧いただきまして……

ありがとうございます！！ 一応、作者です。これは10歳代の時に、エルガイムが「ヘビーメタル」ならば、リップスは「ライトムーヴァー」だ！！ という単なる思いつきから始まった軍記物です。ファンタジックヒーロー物とでもいいでしょうかねえ。広大なハードディスクのどこかに、文章の残渣が残っていないかどうか、現在、鋭意確認中なんですけどもねえ……。

そもそも、架空の大陸の、架空の国同士のいさかいを想像至らしめることは、容易ならざる行為だと思います。やっててつくづくそう思います。ご覧になられている方は、もっと難しいことでしょう。図解をするか……。絵にした方がずっとわかりやすいのですが、如何せん小説ですので、そこは推し量ってください。

2010年10月1日 93ダウンロード、443ページビュー、ありがとうございます！！

どこかの誰かのiPad端末やパソコンで読まれているかと思うと、恥ずかしくもあり、嬉しくもあります。では、作者でした。

2011年1月9日 謹賀新年！！

あけましておめでとうございます。今年もよろしくです。紅葉野日記に煮詰まったのと、姓名の順を、日本風にしたこと。（これは前に、名→姓というふうに、欧米風にしろというアドバイスがあったが、違和感があり、その後、そのアドバイスしてくれた人も消えたことから日本風に）姓→名の順にしました。初期設定がそれだからね。じゃあ、他を書きます！！

2011年9月20日 お久しぶりです！！

お久しぶりです、作者です。このお話は、東欧の民主化（チャウシェスク政権だとか）に刺激されて書き始めたものです、そもそもが。そして、世界観を勝手に変えていった結果、どうなったかということ、西ビザリナ（バイザル公国）と東ビザリナ（ビザリナ共和国）の戦いという具合に戦況は悪化して行きます。のんびりキャラバンをやってきたみんなも、侵略してくる勢力に対しては、戦いを挑まざるを得なくなります。

2011年10月3日 内部的に章を立てました

どうも、作者です。内部的に章を立てました。バイザル皇国が滅びるまでを書こうとしたら、結構なボリュームになりましたので、リップス2を作る必要があるのかなと。

2011年10月5日 Lipsという名の女性ファッション雑誌ができました

こら！ 勝手に盗ってんじゃない！ マガジンハウスメ！ <http://lipsmagazine.jp/>

2011年10月16日 こうやって一年はあっという間に過ぎて行くものなのですね

597ダウンロード、ありがとうございます。少しずつ手を入れていっています。さて、どこに伏線を張り、どんなハプニングを入れようか考え中です。書きながら考える。

2012年3月24日 ああ、越年してしまった

年を越してしまいました。が、忘れたわけではありませんよ。舞台設定をいかに分かりやすく簡潔に正確に書けるか、が問題ですね。正しいイメージを持っていだけけるような文脈。何も考えていないようで、案外アタマを使っているものなのですよ。

2012年3月25日 おまけのストーリーを後部に移動させました

本編と紛らわしいので、校正の時も大変なので、そうしました。章やページは予告なく変更する場合があります。

2013年3月17日 本格始動？していますので、合間を見て書きます。

2013年4月27日 フラン・ドレイク首相……では「共和国」としてはおかしいだろう、と思って、「大統領」に直しました。首相はその下位にあるので、別な名前を考えないと……。

ラノベ入門の本、ラノベを書いたことがある人の書籍がいいな。amazonで見繕うか。あんまりお金ないけど。これ以上使うと、来月の公共料金&食費に影響するからねー。

ライトニングケーブル（iPhone5用）を、間違えて0.5mのを買ってしまって、届いた品物を開けてびっくり。短すぎた……。1mで良かったんだ……。また散財してしまった……。

迷った挙げ句、アマゾンで沖方丁さんの文庫本2冊を買って（たぶん読んでいて頭痛がしないだろうから）明日か明後日に着くと思います。運送会社さんお疲れさまです。実際にラノベを書いた人にしか分からないこともあるかと思うんです。榎本秋さんごめんなさい。今回はパスです。

デイビット・ロッジさんの「小説の技巧」を以前図書館で借りて読み、アマゾンで売ってましたが、外国の作品を出されてもピンと来なかったなので、今回は注文しませんでした。

ブクログのパブーで書いていると、書きかけでバレてしまう。一太郎創で書いたらどうだろう

。折角あるんだし。何ならメモ帳でもいいんですが。プレーンテキストなので。それよりも、このWindows VistaからHDDとOSを入れ替えて使っているHP Compaqのパソコンの寿命が心配。

一太郎「承」（2012年）でした。一太郎8の頃から始めて、バージョンアップ版を続けて来た結果、現在の「承」になるわけですが、ワープロなので、そう画期的に機能が良くなるわけでもなく、2～3年に1度は買い換えているという案配です。それよりも、Office2007の後継を。

ほんの少し「リップス」が進んだ。この世にもあの世にもない地名や固有名詞をひねり出すだけでも頭が痛い。地球に似た全く違う大陸棚なので、よけいにややこしい。しかも、ビザリナ共和国はダウンアンダーの（オーストラリアのような）場所にある。これをどうスムーズに説明するかですね。

2013年5月2日 ゴールデンウィークを利用して、小説を一太郎で書きまくるので、パブで進めずに、一太郎承で進める予定です。これは自分自身との闘いだ。……おにぎりとお茶だけでは、お腹が空くなあ……。

2013年5月18日 ちょっとだけネタバレになるけれど、キャラクター設定に肉付けしました。

2013年5月24日 日曜日はおいらの43歳のバースデー。ワイフはいないけどね（涙）。18歳の頃からずっと20年ばかり働いてきて、いまは病気療養中です。このリップスは、エルガイムの頃からずっと考え続けて来た代物で、時流に合わないだろうけど、面白いので完結させたい小説です。伊丹市立図書館に行ってラノベのいろいろな指南本をまた借りて来て読んでいます。遅咲きのデビューになりそうですね。が、しかーし、物書きに定年などないのであった！今日は風邪気味で作業所を休んだけど、まだまだ頑張ります！

2013年8月18日 しばらく前に、市立伊丹病院の糖尿病内科に3週間ほど入院してました。友人が大荷物で困っている時に、病院までクルマを出してもらい、無事帰りました。さて、コンビニの書棚を見るともなく見ていたら、「クリエイターとプレイヤーのためのファンタジー事典」（笠倉出版社）をゲットしました。



これが剣と魔法のファンタジーバイブルだ！

……というわけで、これを読み込んで、設定に活かして行きたいと思います。半分ぐらいは知っていたものの、半分は（RPGをやらない人なので）知らなかったです。はい。

2013年11月4日 811ダウンロード、5906ページビュー。これは「世界設定が解りにくい」「もう少し頑張れよ」という、皆さんの意思表示だと思っています。架空の大陸、ダウンアンダー、姿の见えないバイザル皇国軍、物事がこれからはとんとん拍子に進まなくなるなど、これからのリップスに期待して頂きたいものです。意外な戦死者が出て、意外な人物が報復する、などのメンバーの活躍というか、悲喜こもごもが展開されて行く予定です。

2014年10月10日 高校生の頃に書いたノートが出て来まして、ジョマ・グリシアがむかし、ジョル・ビパーツであることが書かれていました。これを利用しない手はない、というわけで、登場人物設定では、バイザル皇国版リップス、という立場で、解放戦線協議会という民兵組織のリーダーという設定を加えました。

リップス -The cosmic navigator-

<http://p.booklog.jp/book/2484>

著者：田所稲造

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/inazotaddy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/2484>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：デザインエッグ株式会社